和文概要

太宰春臺『倭讀要領』譯注（三）

坂本具償[*1]

財木美樹[*2]

An Annotated Modern Japanese Translation of "Wadoku-Yoryo"by Dazai Shuntai (3)

Tomotsugu SAKAMOTO

Miki ZAIKI

本稿は、太宰春臺『倭讀要領』下に対して訳註を施したものである。『倭讀要領』は漢文の訓読・音韻・発音などの基礎知識について述べた書で、今日でもなお漢文学習のために有用な書であるが、昨今は他の江戸時代の著作と同様に読まれることが少ないように思われる。それは原本が手に入りにくいこともあるが、江戸時代のもの、旧字体、片仮名書き、句点しか施されていないなどという理由で敬遠する人が多いからであろう。そこで本稿では、現代語訳を作成するとともに、漢文に興味を有する人、漢文を学ぶ初学者に原文でも読みやすいように平仮名で校訂し、句読を施したテキストを附した。

キーワード

太宰春臺　倭読　倭音　倭語

*1 香川高等専門学校名誉教授

*2 比治山大学非常勤講師

太宰春臺『倭讀要領』譯註（三）

坂本具償
財木美樹

はじめに

太宰春臺『倭讀要領』は漢文の訓読・音韻・発音などの基礎知識について述べた書であるが、昨今は他の江戸時代の著作と同様に読まれることが少ないように思われる。それは原本が手に入りにくいこともあるが、片仮名で書かれているということもひとつの要因になっていると思われる。そこで現代語訳を作成するとともに、漢文に興味を有する人、漢文を学ぶ初学者に原文でも読みやすいように平仮名で校訂したテキストを作成した。今回はその巻下に対して譯註を施したものである。

「倭讀例」内の「子虛賦」「上林賦」「古詩十九首」は、作者が「句読や点発を附し、訓点を加え、初学者のために倭読の例を示」しており、パソコンで作製するには複雑すぎるので、自蔵の版本からそのまま影写した。

版本

・『倭讀要領』三巻　享保十三年（一七二八）

影印本

・『倭讀要領』　勉誠社文庫66　一九七九・八
・『漢語文典叢書』第三巻　及古書院　一九八九・三

凡例

一、本訳註は太宰春臺『倭讀要領』巻下に対して訳註を施したものである。
一、本訳註は『倭讀要領』享保十三年刊を底本とし、現代語訳と原文（平假名校訂）から成り立つ。

『倭讀要領』巻下（現代語訳）

下巻

點書法第十一
抄書法第十二
發音法第十三
倭讀例第十四
學則第十五
學戒第十六

倭讀要領巻下

信陽太宰純德夫撰

書に点をつける法

わが国の人が書を読む場合、昔の人は朱を用いて字の四方四角と中心に星をつけて、倭語のテニヲハのしるしとしており、仮名文字を旁註（文字のかたわらに註としてつける）することはなかった。「倭点」というのがそれである。後世ではこの点法はすたれて、もっぱら片仮名を用いて倭訓を旁註し、読むもののために便利となるようにした。この方法が世に行われるようになってから、むかしの点法を知るものもまれとなった。今の倭訓の旁註は旁註であり、点であるとはいえない。しかしむかしの星をつけた時の名を残して「点」といっているのであって、実は点ではないと理解しなければならない。星をつけたむかし方法は、不便なようであるが、学ぶものにとってはとても有益である。仮名文字で倭訓を旁註する

今の方法は、便利なようではあるが、学ぶものにとってはかえって損失がある。仮名に目を奪われて、本文をみるのがおろそかになるからである。だから文学に志を有する今日の学ぶものは、点がないテキストをみなければならない。むかしの点があるテキストには一見点がないようにみえるが、結局倭語の読みのために設けたものなので、これをも禁止すべきである。そもそも中華の書を読むには中華の点法を用いなければならない。中華の人が書を点をつけるのは、句読をわかち文法を示すためである。これがもっとも重要な事柄であり、かならず知っておかなければならない。ここにその大法を録して初学者に示す。

○句読をつける方法はひとつではない。圏を用いたり、批を用いたりする。「圏」とは「○」であり、「批」とは「丶」である。祕書省の校書の点式に「句は字の旁に點じ、讀は字の中間に點ず」①という。中華の書の中にこの点式を用いて句読をつけたテキストがある。その時は小圏を用いる。さらに句には圏を用い、読には批を用いることがある。その時は句も読もすべて旁につける。さらに句と読を区別せず、圏だけを用いることがあり、批だけを用いることがある。その時も句読ともに旁につける。このようにさまざまな点式があり、各人の好みによって臨機応変にいづれの点式を用いてもよい。中華からもたらされた書をたくさん見て、その相違を考察しなさい。

①『字彙』酉集「讀、又大透切、音豆、句讀、凡經書成文、語絶處、謂之句、語未絶而點分之、以便誦詠、謂之讀。今祕省校書式、凡句絶則點於字之旁、讀分則點於字之中間、是也」。

『正字通』酉集上讀の項、『康熙字典』言部讀の項にほぼ同文あり。

○「評点」というのは、文章を読む時に、語のすぐれたところ、字眼、文法の波瀾があるところ、抑揚、起伏、頓挫のところに点を加えることである。圏を用いたり、批を用いたり、〇を用いたり、◎を用いたり、●を用いたりする。その方法はひとつではなく、これがよいとひとつにきめて教えるのはむつかしい。中華の書に先儒が点を加えたテキストがたくさんあるので、それらを集めてみてみるとよい。

○段落を分けるには鉤画を用いる。章の首には「「」を用い、結末には「」」を用いて、前後を隔てる。いづれもこれを「鉤画」という。

○この国の学者の点法に、朱びきというものがある。地名には字の右側に一本線を引き、国名には字の右側に二本線を引き、人名には字の中央に一本線を引き、官名には字の左側に一本線を引き、書名には字の中央に二本線を引き、年号には字の左側に二本線を引く。和歌に次のようにいう、

右所、中は人の名、左官、中二は書の名、左二は年号

中華にはこのようなさまざまに線を引く方法はない。人名には字の右側に一本線を引き、地名には字の右側に二本線を引くだけである。書名には字の右側に二本線を引く書もある。しかし大抵は地名に線を引くことはなく、人名に線を引くだけのことが多く、官名や年号などにはまったく線を引かない。さらに日本の線引きは字の左右に線を引くが、字にかけて線を引くものもある。中華の線引きは、かならず字をはづして線を引く。さらに中華では、刪去すべき字には字の中央に線を引く。これはわが国の人名の線引きとおなじであり、これを「抹」という。「抹」は塗抹のことであり、ぬりけすことである。そもそも書を読むときに、地名・官名・書名・年号などはわかりやすいが、人名ははなはだ（文中に）まぎれやすい。だから中華の人が書に点をつける場合は、大抵人名にだけしか線を引かないのである。

○わが国の人が、書に点をうつにはもっぱら朱を用いる。中華の人は、青・黄・緑・紫などの色を同時に用いる。昔、元の許魯齋（許衡）が通鑑綱目を読んだ時には、五色の色を用いて点をうったといわれている①。これは識別に便利であるのみならず、目を養うところもあるので、朱の一色だけに限らず、自分の好みで他の色を同時に用いてもよい。

①許魯齋の例は未詳。ただ顧起元『客座贅語』巻七に「讀書五色筆」として次の話を引く。

外父少治公嘗謂余言、先輩蔣公名浤、上元人、成化丁未進士、官參議。其少爲諸生、所居在下街口、門有樓二間、即公讀書處也。後罷官歸、猶讀書其上、

杜門掃軌、人罕覿其面。有通鑒綱目一部、毎閲一過、即以一色筆圈誌之、凡數閲、五色皆備。所批字畫精謹、深可寶玩。此不惟見前賢操履清貞、矯矯人外、即其終身學古、無它嗜好、亦當時醇樸寡欲之一端也。沈韓峰侍御看綱目、亦用五色筆。前輩讀書用意大都爾爾、今人鹵莽言之、使人慨歎深。（外父少冶公嘗て余に謂ひて言ふ、先輩蔣公名浤、上元の人、成化丁未の進士、參議に官たり。其れ少くして諸生と爲り、居る所、下街口に在り、門に樓二閒有り、即ち公の讀書の處なり。後に官を罷めて歸り、猶ほ書を其の上に讀み、門を杜じ軌を掃き、人、其の面に覿ふこと罕なり。通鑒綱目一部有り、閲すること一過なる毎に、即ち一色の筆を以て之に圈誌す、凡そ數閲、五色皆備はる。批する所の字畫精謹、深く寶玩とす可し。此れ惟だに前賢の操履清貞、人外に矯矯たるを見るのみならず、即ち其の終身古を學び、它の嗜好無し、亦當時醇樸寡欲の一端なり。沈韓峰侍御、綱目を看るに、亦五色の筆を用ふ。前輩讀書の用意大都爾り爾り、今人鹵莽に之を言ふ、人をして慨歎深からしむ。）

書を抄する法

「抄」はぬきがきのことである。「抄書」とは、書を読む時に有用の語をぬきがきすることである。そもそも書を読むものは、かならず数十枚の紙を小冊子として準備し、みなれない字や重要な語をぬきがきしなければならない。これには五つの益がある。一つには故事や古語を記憶する。二つには他日の検閲に便利である。三つには文字を識る。四つには書学が進む。五つにはぬきがきすることにより、かならずその本書を精密に読むようになる。蘇東坡（蘇軾）の詩に「白首猶ほ書を抄す」①というのは、年老いても抄書をやめないことをいう。さて抄書をするには、かならずととのった楷書で丁寧に書かなければならない。抄書する時に忙しさにかまけて乱雑に書いてはならない。とりあえずこのように書いておいて、後日に改めて写し直そうなどとおもっても、日に日に世事が多くなってゆけば、改めて写し直すいとまはなく、歳月がたってからみてみると、草書で適当に書いたものは、自分の書いたものであっても読みにくい場合がある。ましてや人にみせなければならない時には、かならずや人をあやまらせてしまう。端正に書いたものでさえ、三写すれば烏焉馬のあやまりがある②、ましてや適当に書いたものならなおさらである。学ぶものはこのことに気をつけなければならない。さらに学ぶものは楷書を学ばなければならない。学問にとって楷書より有用なものはない。楷書とは「眞字」のことである。

①蘇軾東坡『覓兪俊筆』「筆工近歳説呉兪、李葛盧名總不如、雖是玉堂揮翰手、自憐白首尚抄書」。

②『周禮』天官・縫人「喪縫棺飾焉」、鄭注「故書焉爲馬、杜子春云、當爲焉」。『事物異名錄』書籍・書訛「董逌除正字謝啓、烏焉混淆、魚魯雜揉、按、古諺、書經三寫、烏焉成馬」。

音を発する法

「音を発する」とは、「発」は点発のことである。「点発」とは四聲の点をつけることをいう。あるいは「圈発」ともいう。その方法は字の四つの角に半圈を加える。平聲は下の左側の角に加える。上聲は上の左側の角、去聲は上の右側の角、入聲は下の右側の角である。そもそも字には獨音（音がひとつのもの）のものがあり、多音（複数の音があるもの）のものがある。天・地・日・月・山・川・林・麓などの字は獨音であり、獨音には点発を用いない。好・惡・知・識・飲・食・衣・冠などの字は多音である。「多音」とはふたつ以上音がある字をいう。三音四音、あるいは五音六音ある字もある。多音の字は点発を用いてその音を区別する。これを「発音」という。多音がある字は、その中のひとつが本音であり、それ以外はいづれも旁出の音である。本音には点発せず、旁出の音には、四聲にしたがって半圈をつけてしるしとする。例をあげていえば、好は上聲であり、「よし」と訓じる。惡は入聲であり、「あし」と訓じる。知は平聲であり、「しる」と訓じる。識は入聲であり、「し

る」と訓じる。飲は上聲であり、「のむ」と訓じ、さらに「のみもの」でもある。食は入聲であり、「くらふ」と訓じ、さらに「くひもの」でもある。衣は平聲であり、「ころも」であり、「きもの」でもある。冠は平聲であり、「かむり」である。以上はいづれも本音であり、点発を用いない。好の字が去聲のときは「このむ」と訓じ、「よみす」と訓じ、「よしみ」と訓じる。惡の字が去聲のときは「にくむ」と訓じる。平聲のときは烏の字と通用して、「いづくんぞ」と訓じる。知の字が去聲のときは智の字と同じで、智慧のことである。識の字が去聲のときは誌と同じで、記憶・記録の意味であり、「しるす」と訓じる。飲の字が去聲のときは「のましむ」と訓じる。食の字が去聲のときは「くらはしむ」と訓じ、「やしなふ」と訓じ、さらに飯の意味であり、「いひ」と訓じる。衣の字が去聲のときは「きる」と訓じる。衣服を着ることである。冠の字が去聲のときは「かむりす」と訓じる。冠を着けることである。以上はいづれも旁出の音である。この時には点発を用いる。それ以外は類推して知ることができる。ただしこれらの類の字は、本音と旁出の音の四聲が別であれば、勿論点発する。さらに著見（ちょけん）の見は音現、「あらはる」「あらはす」「しめす」と訓じ、俗に現に作る。見聞の見と音は別であるが、同じく去聲である。しかし現の音であるときは、去聲に点発してそのしるしとする。歡樂の樂は音洛、「たのしむ」と訓じる。音樂の樂と音は別であるが、同じく入聲である。しかし洛の音であるときは、入聲に点発してそのしるしとする。これらは四聲は異ならないが、旁出の音であることを知らしめるために点発するのである。それ以外はこれらの例から類推することができる。そもそも経史の註に音釈があるのは、その多くがむつかしい字であるからである。「音釈」というのは字音の註を施したものである。音釈には四種類ある。一つは反切、二つは直音、三つは四聲、四つは如字である。「反切」というのは、「見は賢遍の反」とある類がそれである。「直音」というのは、「樂は音洛」とある類がそれである。「四聲」というのは、「重は平聲」「濟は上聲」「易（い）は去聲」「度（たく）は入聲」とある類がそれである。「如字」というのは、「某（それ）は字の如し」とある類がそれである。むつかしい字には反切あるいは直音を附けて、その音を明らかにする。むつかしい字でないのに音釈があるのはかならず多音の字である。多音であることを、反切を附けたり、直音を附けたり、四聲を註したりして、旁出の音であることを知らしめている。「如字」は字の如しということである。多音の字を旁出の音で読まず、本音のままで読むときに「如字」と註するのである。これ以外は、音釈がなければいづれも本音で読む。しかし多音の字を本音で読むときに「如字」と註するのは、（どの音で読めばよいのか）まぎらわしい場合があるからである。まぎらわしくない場合には註する必要はない。そもそも中華の書を読む場合、音釈があるものは音釈にしたがって読み、音釈がないものは点発にしたがって読む。だから初学の士はかならず点発を習わなければならない。これがもっとも重要な事柄である。

倭読の例

倭読の方法はこれまでに述べたとおりである。学ぶものはその趣旨を理解し、その意味を類推すれば、大半は察知することができるであろう。ここでは司馬相如の賦二篇と古詩十九首を収録し、句読や点発を附し、訓点を加え、初学者のために倭読の例を示す。初学者がこれを熟読してその方法を悟ることができれば、文選一冊すべてを読むことができる。文選を読むことができれば、あらゆる経史詩文は自然にその読法を悟ることができるであろう。これもまた一隅をあげる教えである。

【子虚賦、上林賦、古詩十九首の三篇はパソコンで作製するには複雑すぎるので版本から影写することにし、以下に示す。後半の「原文（平假名校訂）」においては、重複を避けて省略することとするので、必要に応じてこちらを参照されたい】

子虚賦　　司馬長卿

楚使子虚使於齊王悉發車騎與使者出畋畋罷子虚過姹烏有先生亡是公存焉坐定烏有先生問曰今日畋樂乎子虚曰樂獲多乎曰少然則何樂對曰僕樂齊王之欲夸僕以車騎之衆而僕對以雲夢之事也曰可得聞乎子虚曰可王車駕千乘選徒萬騎畋於海濱列卒滿澤罘網彌山掩兎轔鹿射麋脚麟驚於鹽浦割鮮染輪射中獲多矜而自伐顧謂僕曰楚亦有平原廣澤遊獵之地饒樂若此者乎楚王之獵孰與寡人乎僕下車對曰臣楚國之鄙人也幸得

宿衛十有餘年時從出遊於後園覽於有無然猶未能徧觀也又焉足以言其外澤乎齊王曰雖然略以子之所聞見而言之僕對曰唯唯臣聞楚有七澤嘗見其一未覩其餘也臣之所見蓋特其小小者耳名曰雲夢雲夢者方九百里其中有山焉其山則盤紆嵯鬱隆崇聳崒岑崟參差日月蔽虧交錯糾紛上干青雲罷池陂陁下屬江河其土則丹青赭堊雌黃白坿錫碧金銀衆色炫耀照爛龍鱗其石則赤玉玫瑰琳瑉昆吾瑊玑玄厲礪石砥砆其東則有蕙圃衡

蘭茝若射干芎藭昌蒲江離蘼蕪諸柘巴苴其南則有平原廣澤登降陁靡案衍壇曼緣以大江限以巫山其高燥則生嵸菥苞荔薜荔青薠其埤濕則生藏莨蒹葭東蘠彫胡蓮藕菰蘆菴閭軒于衆物居之不可勝圖其西則有湧泉清池激水推移外發芙蓉菱華內隱鉅石白沙其中則有神龜蛟鼉瑇瑁鼈黿其北則有陰林巨樹楩柟豫章桂椒木蘭檗離朱楊樝黎梨栗橘柚芬芳其上則有鵷鶵孔鸞騰遠射干其下則有白虎玄豹蝯蠼貙豻於是乎乃使專諸之倫

手搭此獸楚王乃駕馴駁之駟乘彫玉之輿靡魚鬚之檉旃曳明月之珠旗建干將之雄戟左烏號之彫弓右夏服之勁箭陽子驂乘孅阿爲御案節未舒即陵狡獸蹴蛩蛩轔轢虛軼野馬轣騄騄乘遺風射游騏倏忽倩浰雷動猋至星流霆擊弓不虛發中必決眦洞胷達掖絕乎心繫獲若雨獸揜草蔽地於是楚王乃弭節徘徊翱翔容與覽于陰林觀壯士之暴怒與猛獸之恐懼歎息曰嬋視衆物之變態於是鄭女曼姬被阿緆揄紵縞雜纖羅垂霧縠襞積褰縐紆

徐委曲鬱橈谿谷紛紛裶裶揚袘戌削蜚蘥垂髾扶輿猗靡翕呷萃蔡下靡蘭蕙上拂羽蓋錯翡翠之蔽翠繆繞玉綏眇眇忽忽若神仙之髣髴於是乃相與僚於蕙圃蹩姍勃窣而上乎金隄掉翡翠射鵠鵠微矰出孅繳色白鵠連鴦鵠雙鶬鶴下玄鶴加怠而後發游於清池浮文鷁揚旌枻張翠帷建羽蓋網瑇瑁鉤紫貝樅金鼓吹鳴籟榜人歌聲流喝水蟲駭波鴻沸涌泉起奔物會僄石相擊硠硠磕磕若雷霆之聲聞于數百里之外將息獠者擊鼓起烽燧車案行

騎就隊繽于淫淫般乎裔裔於是楚王乃登雲陽之臺怕乎無爲憺乎自持乎翳之和具而後御之不若大王終日馳騁曾不下輿脟割輸烹自以爲娛臣竊觀之齊殆不如於是齊王無以應僕也烏有先生曰是何言之過也足下不遠千里來貺齊國王悉發境內之士備車騎之衆與使者出畋乃欲戮力致獲以娛左右何名爲夸哉問楚地之有無者願聞大國之風列先生之餘論也今足下不稱楚王之德厚而盛推雲夢以爲高奢言淫樂而顯侈靡竊爲足下不取

也必若所言固非楚國之美也有而言之是彰君之惡無而言之是害足下之信彰君之惡而傷私義二者無一可而先生行之必且輕於齊而累於楚矣且齊東者鉅海南有琅邪觀乎成山射乎之罘浮渤海游孟諸邪與肅愼爲鄰右以暘谷爲界秋田乎青丘彷徨乎海外吞若雲夢者八九於其胸中曾不蔕芥若乃俶儻瑰瑋異方殊類珍怪鳥獸萬端鱗萃充牣其中不可勝記禹不能名離不能計然在諸侯之位不敢言遊戲之樂苑囿之大先生又見客是以王辭

不復何爲無以應哉

上林賦　　司馬長卿

亡是公所然而笑曰楚則失矣而齊亦未爲得也夫使諸侯納貢者非爲財幣所以述職也封疆畫界者非爲守樂所以禁淫也今齊列爲東藩而外私肅愼捐國踰限越海而田其於義固未可也且夫二君之論不務明君臣之義正諸侯之禮徒事爭游戲之樂苑囿之大欲以奢侈相勝荒淫相越此不可以揚名發譽而適足以貶君自損也且夫齊楚之事又焉足

道乎君未覩夫巨麗也獨不聞天子之上林乎左蒼梧右西極丹水更其南紫淵徑其北終始灞滻出入涇渭豐鎬潦潏紆餘委蛇經營乎其內蕩蕩乎八川分流相背而異態東西南北馳騖往來出乎椒丘之闕行乎洲淤之浦經乎桂林之中過乎泱漭之壄汨乎混流順阿而下赴隘陿之口觸穹石激堆埼沸乎暴怒洶涌彭湃澎弗窒泊偪側泌瀄橫流逆折轉騰澩溯滂濞沆瀣穹隆雲橈宛潬膠盭蹴波趨浥莅莅下瀨批巖衝攠奔揚滯沛臨坻注壑瀄瀱實壑沈沈

隱隱砰磅訇磕漬漬淵淵洶洶潗潗鼎沸馳波跳沫汩潏漂疾悠遠長懷寂寥無聲肆乎永歸然後灝溔潢漾安翔徐回翺翔乎滈滈東注太湖衍溢陂池於是乎蛟龍赤螭魰鱣漸離鰅鱅鰅鱋禺禺魼鰨捷鰭掉尾振鱗奮翼潛處乎深巖鮫鼉讙聲萬物衆夥明月珠子的皪江靡蜀石黃礫水玉磊砢磷磷爛爛采色淆汗叢積乎其中鴻鵠鵠鴇鴛鴦屬玉交精旋目煩鶩庸渠箴菰鴨鳧鷖浮乎其上沉淫泛濫隨風澹淡與波搖蕩掩薄水渚唼喋菁藻咀嚼菱藕於是乎崇山蘥

蘥龍嵸崔巍深林巨木嶄巖嵾嵳九嵕巀嶭南山峩峩巖陁巖錡崔嵬崛崎振溪通谷蹇產溝瀆谽呀豁閜阜陵別隝崴磈嵔嵬丘虛堀礨隱轔鬱壘登降施靡陂池貏豸沇溶淫鬻散渙夷陸亭皐千里靡不被渠揜以綠蕙被以江離糅以麋蕪雜以留夷布結縷攢戾莎揭車衛蘭槀本射干茈薑蘘荷葢橙若荔鮮支黃礫蔣芧青薠布濩閎澤延蔓太原離靃廣衍應風披靡吐芳揚烈郁郁菲菲衆香發越芬芳馥布爲晻藹咇茀於是乎周覽泛觀縝紛軫芿芒芒恍忽視之

無端察之無崖。日出東沼。入乎西陂。其南則隆冬生長。涌水躍波。其獸則猵旄貘犛。沈牛麋麋。赤眉圈題。窮奇象犀。其北則盛夏含凍裂地。涉氷揭河。其獸則麒麟角端。騊駼橐駝。蛩蛩驒騱。駃騠驢贏。於是乎離宮別館。彌山跨谷。高廊四注。重坐曲閣。華榱璧璫。輦道纚屬。步櫚周流。長途中宿。夷嵕築堂。累臺增成。巖突洞房。俯杳眇而無見。仰攀橑而捫天。奔星更於閨闥。宛虹拖於楯軒。青龍蚴蟉於東廂。象輿婉嬋於西清。雲罔滲於閒館。偓佺之倫。暴於南榮。醴泉涌於清

室。通川過於中庭。盤石振崖。嶔巖倚傾。嵯峨嶕嶢。刻削崢嶸。玫瑰碧琳。珊瑚叢生。璠玉旁唐。玢豳文鱗。赤瑕駁犖。雜糅其間。暴鬃斑駁。和氏出焉。於是乎盧橘夏熟。黃甘橙榛。枇杷橪柿。梬棗楊梅。櫻桃蒲陶。隱夫薁棣。荅遝離支。羅乎後宮。列于北園。脩五陵下。平原揚翠葉。杌紫莖。發紅華。垂朱榮。煌煌扈扈。照曜鉅野。沙棠櫟櫧。華楓枰櫨。留落胥邪。仁頻并閭。攙檀木蘭。豫章女貞。長千仞。大連抱。夸條直暢。實葉葰楙。攢立叢倚。連卷欐佹。崔錯癹亂。坑衡閜砢。垂條扶疎。落英幡纚。紛溶蔚蕊。猗柅從風。翻翻扬翕。蓋象金石之聲。管籥之音。榮池北麓。旋還乎後宮。雜遝乎輯被。山緣谷循。坂下隰視之。無端究之。無窮。於是乎玄猿素雌。蜚飛蠊。蛭蜩蠼。猱獑胡。縠蛇棲息乎其間。長嘯哀鳴。翩翩互經。夭蟜枝格。偃蹇枝頭。踰絕梁。騰殊榛。捷垂條。掉希間。牢落陸離。爛熳蔓遷。若此者數百千處。娛游往來。宮宿館舍。庖厨不徙。後宮不移。百官備具。於是乎背秋涉冬。天子校獵乘鏤象。六玉虬。拖蜺旌。靡雲旗。前皮軒。後道游。孫叔奉轡。衛公參乘。扈從橫行。出乎四校之中。鼓嚴鐋。縱獠者。江河爲阬。泰山爲櫓。車騎雷起。殷天動地。先後陸離。離散別追。淫淫裔裔。緣陵流澤。雲布雨施。生貔豹。搏豺狼。手熊羆。足豜羊。蒙鵰蘇。絡白虎。被斑文。跨騁馬。凌三嵕之危。下。積歷之坻。徑峻赴險。越壑厲水。椎飛薦。弄獬豸。格瑕蛤。鋋猛氏。羂騕褭。射封豕。節不苟害。解脰陷脳。弓不虛發。應聲而倒。於是乎乘輿弭節。徘徊翺翔。往來睨部曲之進退。覽將帥之變態。然後侵淫促節。儵忽遠去。流離輕禽。蹉履狡獸。轚白鹿。捷狡兎。軼赤

電遺光耀追怪物山宇宙鸞蕃弱滿白羽射游梟檎
飛遽撑肉而後發兕卩而命處弦矢分藝殪仆然後
揚節而上浮凌驚風歷駭猋乘虛無與神俱躡玄鶴
亂昆鷄遒孔鸞促鵁鶄拂翳鳥捎鳳皇捷鵷鶵捻焦
明道盡塗殫迴車而還招搖乎儴佯降集乎北紘率
乎直指晻乎反鄉蹙石闕磴封巒過鵁鶄望露寒下
棠梨息宜春西馳宣曲灌觀牛首登龍臺掩細柳觀
士大夫之勤略均獵者之所得獲徒車之所轔轢步
騎之所蹂若人臣之所蹈藉與其窮極倦乏驚懼讋

伏不被創刃怖而死者他他藉藉塡阬滿谷掩平彌
澤於是乎游戲懈怠置酒乎顥天之臺張樂乎膠葛
之寓撞千石之鐘立萬石之虡建翠華之旗樹靈鼉
之鼓奏陶唐氏之舞聽葛天氏之歌千人倡萬人和
山陵爲之震動川谷爲之蕩波巴俞宋蔡淮南干遮
文成顚歌族居遞奏金鼓迭起聲鎗闛茷洞心駭耳
荊吳鄭衛之聲韶濩武象之樂陰淫案衍之音鄢郢
繽紛激楚結風俳優侏儒狄鞮之倡所以娛耳目樂
心意者麗靡爛漫於前靡曼美色於後若夫青琴宓

妃之徒絕殊離俗妖冶閑都靚粧刻飾便嬖綽約柔
橈嫚嫚嫵娟嫵嫵嫵弱曳獨繭之褕袘眇閻易以卹削便
姍嫳屑與俗殊服分芳澤芬芳馥郁皓齒粲爛宜
笑的皪長眉連娟微睇緜藐色授魂與心愉於側於
是酒中樂酣天子芒然而思似若有亡曰嗟乎此太
奢侈朕以暨聽餘閒無事棄日順天道以殺伐時休
息於此恐後葉靡麗遂往而不返非所以爲繼嗣創
業垂統也於是乎乃解酒罷獵而命有司曰地可墾
闢悉爲農郊以贍萌隸頹墻塡壍使山澤之人得至

焉實陂池而勿禁虛宮館而勿仞發倉廩以救貧窮
補不足恤鰥寡存孤獨出德號省刑罰改制度易服
色革正朔與天下爲更始於是歷吉日以齋戒襲朝
服乘法駕建華旗鳴玉鑾游乎六藝之囿馳騖乎仁
義之塗觀春秋之林射狸首兼騶虞之囿鶴舞于
戚載雲罕揜羣雅悲伐檀樂樂胥脩容乎禮圃翱翔
乎書囿述易道放怪獸登明堂坐清廟次羣臣奏得
失四海之內靡不受獲於斯之時天下大說向風而
聽隨流而化蒞然興道而遷義刑錯而不用德隆於

三王而功羨於五帝若此故獵乃可喜也若夫終日馳騁勞神苦形罷車馬之用抗士卒之精費府庫之財而無德厚之恩務在獨樂不顧衆庶忘國家之政貪雉兎之獲則仁者不爲也從此觀之齊楚之事豈不哀哉地方不過千里而囿居九百是草木不得墾闢而民無所食也夫以諸侯之細而樂萬乘之侈僕恐百姓被其尤也於是二子愀然改容超若自失遂巡避席曰鄙人固陋不知忌諱乃今日見教謹受命矣

古詩十九首　　無名氏

行行重行行與君生別離相去萬餘里各在天一涯道路阻且長會面安可知胡馬依北風越鳥巢南枝相去日已遠衣帶日已緩浮雲蔽白日游子不顧返思君令人老歲月忽已晚棄捐勿復道努力加餐飯

青青河畔草鬱鬱園中柳盈盈樓上女皎皎當窗牖娥娥紅粉粧纖纖出素手昔爲倡家女今爲蕩子婦蕩子行不歸空牀難獨守

青青陵上柏磊磊澗中石人生天地間忽如遠行客斗酒相娛樂聊厚不爲薄驅車策駑馬游戲宛與洛洛中何鬱鬱冠帶自相索長衢羅夾巷王侯多第宅兩宮遥相望雙闕百餘尺極宴娛心意戚戚何所迫今日良宴會歡樂難具陳彈箏奮逸響新聲妙入神令德唱高言識曲聽其真齊心同所願合意俱未申人生寄一世奄忽若飈塵何不策高足先據要路津無爲守窮賤轗軻長苦辛

西北有高樓上與浮雲齊交疏結綺窻阿閣三重階上有絃歌聲音響一何悲誰能爲此曲無乃杞梁妻清商隨風發中曲正徘徊一彈再三歎慷慨有餘哀不惜歌者苦但傷知音稀願爲雙鳴鶴奮翅起高飛涉江采芙蓉蘭澤多芳草采之欲遺誰所思在遠道還顧望舊鄉長路漫浩浩同心而離居憂傷以終老

明月皎夜光促織鳴東壁玉衡指孟冬衆星何歷歷白露霑野草時節忽復易秋蟬鳴樹間玄鳥逝安適昔我同門友高舉振六翮不念攜手好棄我如遺跡南箕北有斗牽牛不負軛良無盤石固虛名復何益

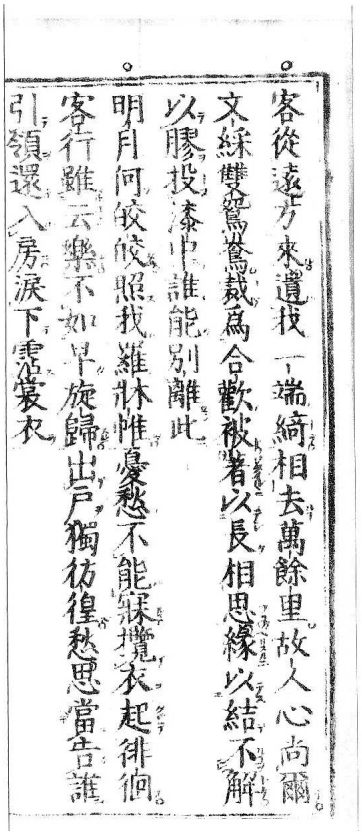
冉冉孤生竹結根泰山阿與君爲新婚兎絲附女蘿

兎絲生有時夫婦會有宜千里遠結婚悠悠隔山陂
思君令人老軒車來何遲傷彼蕙蘭華含英揚光輝
過時而不采將隨秋草萎君亮執高節賤妾亦何爲
庭中有奇樹綠葉發華滋攀條折其榮將以遺所思
馨香盈懷袖路遠莫致之此物何足貴但感別經時
迢迢牽牛星皎皎河漢女纖纖擢素手札札弄機杼
終日不成章泣涕零如雨河漢清且淺相去復幾許
盈盈一水間脉脉不得語
迴車駕言邁悠悠涉長道四顧何茫茫東風搖百草

所遇無故物焉得不速老盛衰各有時立身苦不早
人生非金石豈能長壽考奄忽隨物化榮名以爲寶
東城高且長逶迤自相屬迴風動地起秋草萎已綠
四時更變化歲暮一何速晨風懷苦心蟋蟀傷局促
蕩滌放情志何爲自結束燕趙多佳人美者顏如玉
被服羅裳衣當戶理清曲音響一何悲絃急知柱促
馳情整巾帶沉吟聊躑躅思爲雙飛鴈銜泥巢君屋
驅車上東門遥望郭北墓白楊向蕭蕭松柏夾廣路
下有陳死人杳杳即長暮潛寐黃泉下千載永不寤

浩浩陰陽移年命如朝露人生忽如寄壽無金石固
萬歲更相送聖賢莫能度服食求神仙多爲藥所悞
不如飲美酒被服紈與素
去者日以疎生者日以親出郭門直視但見丘與墳
古墓犂爲田松柏摧爲薪白楊多悲風蕭蕭愁殺人
思還故里閭欲歸道無因
生年不滿百常懷千歲憂晝短苦夜長何不秉燭遊
爲樂當及時何能待來茲愚者愛惜費但爲後世嗤
仙人王子喬難可與等期

凜凜歲云暮螿蛩夕鳴悲涼風率已厲游子寒無衣
錦衾遺洛浦同袍與我違獨宿累長夜夢想見容輝
良人惟古懼枉駕惠前綏願得常巧笑攜手同車歸
既來不須臾又不處重闈亮無晨風翼焉能凌風飛
眄睞以適意引領遥相睎徙倚懷感傷垂涕霑雙扉
孟冬寒氣至北風何慘慄愁多知夜長仰觀衆星列
三五明月滿四五蟾兎缺客從遠方來遺我一書札
上言長相思下言久離別置書懷袖中三歲字不滅
一心抱區區懼君不識察


客從遠方來遺我一端綺相去萬餘里故人心尚爾
文綵雙鴛鴦裁爲合歡被著以長相思緣以結不解
以膠投漆中誰能別離此
明月何皎皎照我羅牀帷憂愁不能寐攬衣起徘徊
客行雖云樂不如早旋歸出戸獨彷徨愁思當告誰
引領還入房淚下霑裳衣

右、二賦、十九詩。倭讀の体裁はおおよそ以上のとおりである。いづれも句読を正し、繁雑冗長な読みをやめて簡約に従い、義理が通じることを主な目的としている。初学者はこれに習熟したあと、倭刻の文選を読んで、古来の読みと今の読みは繁簡が異なることを認識会得すれば、正誤はおのづと理解できる。これ以外の書であってもすべて同じであり、かならずしも師と顔をつきあわせてひとつひとつ教えを受ける必要はない。

学則

学問の道は今と昔で異なり、中華とわが国で同じではない。近世の諸儒は、自分の好みにしたがってそれぞれ一家を成し、みづから流派を立てる。その専門は人それぞれで異なり、もつぱら経義を議論して道徳を修得するものがあり、文学を講じるものがあり、詩を好むものがあり、宋儒の理学をたっとぶものがあり、博覧につとめて群書を渉獵するものがあり、名物度数を詳しく研究するものがある。これらの人々の学は、それぞれ明らかにするところがあり、いづれも当時の師範たる人である。後世の学者がどうして軽々しくこれをあれこれいうことができようか。ただ残念なことに、道徳を談じるものは文章に通じておらず、文学を講じるものは経義にくらく、理学をたっとぶものは風雅の趣がなく、渉獵につとめるものは駁雑におわり、名物を研究するものは大道を理解していない。さらに詩を作るものは文が不得手であり、文を作るものは詩が不得手である。これらはいづれも学問の道において、そのいちばん大切なところを知らず、本を捨てて末を追いかけ、一方にかたよって全体を見ていないからである。このようなものは通儒ということはできない。時代には古今のちがいはあるが、学問の道がふたつあるわけではない。人はみな霊智をそなえており、うまく学ぶことができたときは、古人と肩をならべることもできる。だから学問はあやまった路を履まず、正しい方向にむき、その門をみつけて入らなければならない。そのようにできたあかつきには、志の深淺と器の利鈍によってその到達度に大小高下はあるが、その才徳はかならずや古人にせまることができる。今童蒙のために学問の法則を立て、従学の徒に示す。

○そもそも書生の学業は句読を習うことから始まる。中華で句読を習うというのは、この国でいう素読のことである。句読を習うには、まづ華音を学び、それにほぼ習熟したあとに倭語の読みを習わなければならない。その習う書は孝經を手始めとする。なぜならば孝は百行の根本であり、天子から庶人にいたるまで通行する道だからである。次に論語を受けなければならない。論語は聖人の祕奥、六経の要領である。聖人の道を学ぶものは、かならず孔子を信奉しなければならない。論語を読むのは、孔子の尊いことを知るためである。四書を用いるのは宋儒以来のことである。大学・中庸は禮記の中にある一篇である。孟子は諸子の類であり、その説には孔子の趣旨に一致しないところがある。初学の士が読むべき書物ではなく、とりあえず読まずに置いておいてよい。次に毛詩、次に尚書を読まなければならない。左傳に「詩書は義の府なり」①という。昔、周代に樂正の官があり、士の養成をつかさどり、詩・書・禮・樂の四つを貴族の子弟に教えた。これを「四術」「四教」という。一年のうち、春秋には禮・樂を教え、冬夏には詩・書を教えたという②。四教のうち、禮・樂のふたつはもつぱらその技術を習い、詩・書のふたつはもつぱらその文

を誦読する。だから古人が「詩を誦す」③、「書を讀む」④というのは、その文を誦読することをいうのである。後世は禮樂の教えが伝わらず、その技術を習うすべがなく、経伝の記載を見て、わずかにその意味を考えることしかできない。詩書はその文が伝わっているので、これを誦読することによって、なんとか古にせまることができる。だからこのふたつの書に孝經・論語を加えて、もつぱらこれを誦読することを童子の学業としなければならないのである。幼学のものが句読を受けるのは、この四部の書だけでよい。他の書はかならずしも師の口授を待ってから読もうと思ってはならない。この四部の書を誦習して、文字を識り句読をきわめれば、あらゆる書物を読むことができる。今の学ぶものは童子の時に師について四書五經などを受け読んだけれども、ただこの国の点のあるテキストを用いて倭読を授かり、わづかに一二回読み通しただけであり、みづからその書を誦習することはないので、文字を識らず句読をわきまえず、その文を記憶することもない。そこで世事にさまたげられ、少しでも学問をやめれば、その受け読んだ四書五經でさえ忘却することが多い。そのようなものが他の書をどのようにして読むことができようか。これが学んで習わないことの欠点である。だから孔子が「學んで時に之を習ふ」⑤とおっしゃったのである。そもそも学業は習熟をたっとぶので、たくさん学んで習熟しないより、少なく学んで習熟したほうがよい。今童子の学は、孝經、論語、毛詩、尚書の四部の書を誦習することが第一の努めであると想定した。さてこの四部の書を読むには、註のついているテキストを用いてはならない。孝經は孔安國が伝を加えた古文を用いて本文を書き写し、それ以外の三部は、十三經の中からそれぞれその本文を書き写し、毛詩と尚書は小序をあわせて書き写すさなければならない。その上で孝經は孔安國註の義に従い、論語・詩・書は註疏の義に従って句読を明らかにし、字音を正し、法則どおりに点画を加えなければならず、決して倭点を加えたり国字を附けたりしてはならない。受け読むことに関しても、欲張ってたくさん受け読んではならない。最初は一日に十字二十字からはじめ、力がつくにしたがって次第に増加して五六十字にいたり、二百字ばかりを限度としなければならない。人の記憶力には強い弱いがあり、精力に多い少ないがあるので、一概にこれと決まった量をきめるのはむつかしい。しかし多く受ければ誦習するのがむつかしく、忘れるのもはやい。いかに聰明伶俐なものであっても、今いった限度を越えてはならない。さらに当日授かったところをすぐに百回以上読み返さなければならない。その上で前数日に授かったところを今日授かったところにつづけて、さらに五六十回読み返さなければならない。誦読するときには、ゆっくりと読み、急いで読んではならない。聲音が響きわたり、吾伊⑥がないように読むのがよい。「吾伊」とは、利発でないものが書を読むにあたり、つまって読み下せない時に、吾伊という聲を出してうめくことをいう。これはもっとも耳障りがよくないことである。要するに読書は、華音でも倭読でも、人が聞いて耳障りがよく、面白く聞こえるように読む、これもひとつのこころがけである。さらに学業は日課を定めて勤めなければならない。「日課」とは、毎日これこれの事をどれだけ行なうべきかということを定めておいて、なまけることなく行うことをいう。歴代の学者の中には往々にして読書の法を定めているものがある。(その内容は) それぞれの流派によって異なるが、大抵みな習熟することを貴び、厳密に定めた課程にしたがわなければならないことについて述べている。初学者はもっぱらこの事に心をくばり、努力して遵行しなければならない。中庸に「人一たびに之を能くすれば、己之を百たびす。人十たびに之を能くすれば、己之を千たびす」⑦という。才智が人に及ばないことを心配してはならない、ただ志が立たず、努力の足りないことを恥じなければならない。

①『左傳』僖公二十七年「趙衰曰、郤縠可。臣亟聞其言矣、説禮樂而敦詩書。詩書、義之府也、禮樂、德之則也、德義、利之本也」。

②『禮記』王制「樂正崇四術、立四教、順先王詩書禮樂以造士。春秋教以禮樂、冬夏教以詩書」。

③『禮記』禮器「誦詩三百、不足以一獻」。

④『禮記』文王世子「春誦夏弦、大師詔之瞽宗。秋學禮。執禮者詔之。冬讀書」。

⑤『論語』學而「子曰、學而時習之、不亦説乎。有朋自遠方來、不亦樂乎。人

不知而不慍、不亦君子乎」。

⑥「吾伊」とは、読書をしているときの声。黄庭堅『考試局與孫元忠博士竹閒對窓、夜聞元忠誦書、聲調悲壯、戲作竹枝歌三章和之』「南窓讀書聲吾伊、北窓見月歌竹枝」。

⑦『禮記』中庸「人一能之、己百之。人十能之、己千之、早能此道矣、雖愚必明、雖柔必强」。

○四部の書が誦読し習熟しおわり、諳記できるようになると、古註の三禮、周易、ならびに春秋の三傳、國語を四五回読まなければならない。「三禮」とは周禮、儀禮、禮記である。「春秋の三傳」とは、左氏、公羊、穀梁の三傳である。「國語」も左丘明の作であり、春秋に属する書であるので、一名を「春秋外傳」という。初学者がこれらの書を読む場合、かならずしもその意味を明らかにする必要はなく、ただ本文を記憶することに務めなければならない。その理由は、六経の義理は初学者が容易に理解できるものではなく、かならず古書をあまねく閲覧し、古訓を詳しく研究し、歳月を積みかさねた後にはじめてそのことばの意味に通じることができるので、決して初学者の急務ではない。しかし六経は教育の規範、文章の本源であるので、学びはじめの時にこれを読まなければ、根本をうちたてることはできない。以上の学業が終れば、六経はすべて読み終っているはずなので、次に文選を読まなければならない。聖人の道は文章が根本であり、文選は文学の入門である。初学者は六経を読み、その文句を記憶しおわった上で、文選の白文をつづけて五六回つづけて読まなければならない。この場合も無理にその意味を明らかにしようとはせず、ただ文句を記憶することが重要である。そもそも初学の士がさきの四部の書を誦習し習熟しおわったならば、六経・文選の類は人から句読を授かる必要はなく、自分の力でほぼ読むことができる。もし知らない字にあえば、梅誕生（梅膺祚）に問うがよい。「梅誕生に問う」とは、字彙①を閲覧してその字を探し求めることである。その上でまだ読みにくいところがあっても、無理に読もうとしてはならない。とりあえずその部分を置いておいて、次の文に移るのがよい。このようにして数回繰り返して読めば、はじめは読みにくかったところが後には自然に読めるようになる。そもそも書を読むものは、かならず字彙を一部座右に置かなければならない。古今に字書はたくさんあるが、他の字書は文字検索が面倒である。字彙はとても検索しやすく、骨が折れることはないからである。六経・文選の学業が終れば、ようやく文字をたくさん認識することができ、義理の路も開けるので、童子の学業はこれでひとまず完成したといってよい。

①明・梅膺祚『字彙』十二集。

○六経・文選の学業が終り、やや実力が備わったと自覚すれば、司馬遷の史記を始めから終りまで一度熟読しなければならない。次に班固の漢書をやはり始めから終りまで一度熟読しなければならない。「熟読」とは、さきの六経・文選を読んだ時のように、その文だけを読みくだすのではなく、意味を考え、文法を玩味しながら、仔細に読むことである。そのうち史記の律書、歴書、天官書、漢書の律歴志、天文志などは、専門的な事を学ばなければその書は読みがたいうえに、初学者の急務ではないので、とりあえず省略してよい。この二書は古文の純粋なものなので、読みにくく理解しにくいところが多い。ひとつのこらず究（きわ）めようとすれば、一箇所にとどまって進みがたく、ついには退屈な気持ちが生じるので、難解なところをとばして、やさしいところを読むのがよい。反覆熟読して、本末貫通し、さらに他の書を読んであれこれ融会すれば、自然に通暁するようになる。そもそも書を読むには融会貫通ということがある。いづれにしても一冊の書を読むにあたって、理解しがたいところをかならず理解してやろうとおもって一箇所に停滞していては、どれだけあせったとしてもいつまでも通じない。とりあえずその部分を置いておいて、理解しやすいところだけを読み、その一冊を終えてさらに他の書を読めば、思いがけずこれまでに読んだ書と思いあわさることがあり、年月を積みかさねてひろくさまざまな書を読めば、かならずあれとこれとがたがいに明らかにしあい、従来の疑問なども次第にとけることがある。これを「融会」という。この融会は一冊の書の内にもあることである。融会とはたとえば氷がとけるようなものである。大きな池の氷

は、春風が吹いても一朝一夕ではとけないけれども、あちこちからとけはじめると、一気に池全体の氷がとける。さらに一冊の書を読むにあたって、眼が全体にゆきわたらなければ、その要旨を理解することはできない。かならず数十回数百回と反覆熟読し、全体を一目でみわたせるようになったときにはじめて始終本末がたがいに照合しあい、暗くて見えなかったところがなくなる。ここにいたって一冊の書の大義ははじめて明らかとなる。これを「貫通」という。これは一冊の書の内だけに限らず、六経なども結局ひとつの理で貫通しているものである。貫通とはたとえば道路を行くようなものである。行きなれない路を「生路」といい、行きなれた路を「熟路」という。なれない路を行くのは不安なものである。同じ路を何度も往復して習熟すれば、けわしいところや平坦なところ、高いところや低いところを心にそらんじて、闇夜でも迷うことはない。これが融会貫通の説である。そもそも学問は急いではならない。優柔不断であるかのように、ゆっくりと行なわなければならず、水にプカプカただようように、物を水にひたして水気がしみとおるのを待つようにしなければならない。杜預の左傳の序に「優にして之を柔にす、自ら之を求めしむ。饜にして之を飫す、自ら之に趨かせしむ。江海の浸し、膏澤の潤すが若く、渙然として冰釋し、怡然として理順ふ。然る後に得たりと爲すなり」①というのは、この意味である。「饜飫」とは、思惟して自得した時の喜び方が、飢えたものが食物を手に入れて喜び満足するのと同じであることをいう。

①杜預『春秋左氏傳』序「優而柔之、使自求之、饜而飫之、使自趨之。若江海之浸、膏澤之潤、渙然冰釋、怡然理順。然後爲得也」。

○史記・漢書が読みおわれば、次に司馬溫公（司馬光）の資治通鑑①を一度読まなければならない。そもそも学ぶものは古今の事実を貫通して理解することが重要な務めである。ところがわが国の人は、中国はいかなる国で、いづれの代にいかなる帝王がおり、いかなる政を行い、いかなる賢人君子があり、いかなる事を行い、その代はいかにして興り、いかにして亡んだかということを知らない。だから経書を読んだとしても、ぼんやりして事の道理に到達しないのである。だから史記・漢書以下、歴代の歴史書を読んでその事実を理解しなければならないのであるが、二十一史などの書は大部で浩瀚であり、すぐに読み通すことはできない。そこでその大略を記載するもののうちでは、資治通鑑より最適なものはない。朱子の資治通鑑綱目②は資治通鑑にもとづいて作られてはいるが、綱目を立てて記述しているので事実が連続しない。そのうえ議論がきびしく、宇宙の間に完全な人間はひとりとして存在していないと考えているようにみえる。初学者がこれを読めば、是非の心が盛んとなって、仁を阻害するおそれがある。溫公の通鑑は、文が連続していて、事実を見るのに便利である。議論も綱目よりややすぐれている。初学者がこれを一覧すれば、天下古今の事件の大略がわかるので、他の諸書を読む時に参考となる場合が多い。さらに学力がやや進んだ上で二十一史などを読んで知識を広くしなければならないのであるが、その時になって、さきに通鑑を読んだおかげでその大綱を理解することができる。これがとりもなおさず学問の重要な道筋である。さて通鑑を読むには、事実を看ることが必要であり、かならずしも議論の箇所を研究しなくてもよい。

①司馬光『資治通鑑』二百九十四巻。

②朱熹『資治通鑑綱目』五十九巻。

○初学者の務めは、さきにいったとおりであり、順序立てて学業をしおえたならば、ほぼ全力をだしきったことになり、古学の基礎はすでに確立したといえる。ここからはその学力の高下にしたがって博文に務めなければならない。「博文」とはひろく古今の書を覧ることである。しかし聖人の道は六経の中に存在し、六経を明らかにしなければ通儒ということはできない。六経を学ぶことが古学である。六経はすべて文章であり、文章に通じていなければ六経を読むことはできない。六経の文は古文である。だから古文に通じていなければ六経を読むことはできない。古文の学とは古書を読むことである。「古書」とは西漢以上の書を指していう。東漢以後は、文章が古におよばず、六朝以降は、古文が変化して四六文となり、古の文からはるか遠くかけはなれてしまった。だから古学に志すものは、もっぱら西漢以上の書を読

んで、古文辞を習わなければならない。古文辞に熟達した上で、後世の書も読み、見聞を広くしなければならない。ただ古書の中にも本物と偽物、純粋なものと雑駁なものがあり、一概に信用できるわけではない。先秦の文には、左傳、國語、老子、墨子、晏子春秋、公羊傳、穀梁傳、孟子、荀子、莊子、列子、韓非子、楚辭、戰國策、呂氏春秋があり、西漢の文には、淮南子、史記がある。これらはすべて古文の純粋なものである。班固の漢書は東漢の文ではあるが、西京（西漢）の気格を失っておらず、太史公（司馬遷）とならび称されるので、後人はこれを尊んで先秦西漢の古文に列したのである。文選は梁代に昭明太子が編集したものであり、東漢以後の文もたくさん収められているが、古文のすぐれたものを多数掲載し、なおかつ文体を分類しているので、後世ではこれを文学の模範とする。だから明の汪伯玉（汪道昆）は古文十三家の中に文選を入れたのであり①、その十三家はいづれも上にあげた古書の内に含まれている。

①李維楨「太函集序」（『大泌山房集』巻七）に「先生の文、上は則ち左氏内外傳、戰國策、屈、宋、老、莊、次は則ち列、荀、呂覽、鴻烈、班、范の書、昭明の選、凡そ十三家。法、是の如くして止む」とあり、徂徠の門人である山縣周南は『作文初問』第四條に「汪伯玉ハ十三家ヲ定メテ比年ニ一周セシト云リ、……所謂十三家ハ、左傳、國語、戰國策、史記、漢書、荀子、呂覽、老子、列子、莊子、楚辭、淮南子、文選。此外ニ韓非子、水經、世説、讀書セズンバアルベカラズト、徂徠先生ハ云ハレシナリ」という。詳しくは白石真子『汪道昆「六経十三家」とは何か』（『名古屋大学中国語学文学論集』22、2017・5）参照。

○そもそも学ぶものには師がなくてはならず、また友がなくてはならない。師は道を問い、学業を受け、惑いを解くものではあるが、尊い方なので、平日の学問の助けとはなりにくい。（その場合は）友をあつめて講習討論すれば、聞見を広くするのにとりわけ有益である。友の中に先輩があれば、教え導き道に進ませてくれる功用がある。だから師に学ぶだけで友の助けがないものは、学業が成就するのはむつかしい。そこで曾子の言葉に「君子は文を以て友を會し、友を以て仁を輔く」①とあり、學記には「獨學して友無ければ、則ち固陋にして聞くこと寡し」②という。今の学ぶものも、上に挙げたような古書を読むにあたって、友がいないものは漢の孫敬のように戸を閉じてひとりで読むのがよい③、友があるものはひとところに集まって会読するのがよい。

①『論語』顔淵「曾子曰、君子以文會友、以友輔仁」。

②『禮記』學記「發然後禁、則捍格而不勝、時過然後學、則勤苦而難成、雜施而不孫、則壞亂而不修、獨學而無友、則孤陋而寡聞、燕朋逆其師、燕辟廢其學。此六者、敎之所由廢也」。

③『楚國先賢傳』（『蒙求』巻上）「孫敬、字文寶、常に戸を閉ぢて書を讀む。睡れば則ち繩を以て頸に繫け、之を梁上に懸く。嘗て市に入り、市人之を見て、皆曰く、閉戸先生來ると。辟命あるも至らず」（孫敬、字文寶、常閉戸讀書。睡則以繩繫頸、懸之梁上。嘗入市、市人見之、皆曰閉戸先生來也。辟命不至）。

○そもそも学ぶものは風雅の心情を持っていなくてはならない。風雅の趣を知るのは、詩を学ぶかどうかにかかっている。しかし古人の詩を読んでその意味をきわめ明らかにしても風雅の趣を知ることはできるが、みづから詩を作らなければ心底からその意を理解することはできない。詩を作ろうとおもえば、まづ体裁を辨別熟知しなければならない。「体」とはすがたであり、「裁」とはつくりである。詩にはさまざまな体がある。わが国の和歌に、長歌、短歌、旋頭、混本などがあるのと同じである。詩の体はおおまかにふたつに分けられる。一つは古詩の体、二つは近体である。毛詩三百篇から唐の初めまでの詩を「古詩」といい、唐の律詩・絶句を「近体」という。古詩の中にさらに諸体がある。風雅の体があり、樂府の体があり、選詩の体があり、唐の古詩がある。「風雅」とは詩經三百篇の体である。「樂府」とは漢朝以来、歴代の樂歌の辞である。「選詩」とは文選の詩である。これを「選体」という。「唐の古詩」とは唐人が作った古風の詩である。さらに古書に掲載する歌謡な

どの詞をまねて作ったものを「擬古」という。このように詩にはさまざまな体があり、一種類ではない。近体は唐の五言七言の律詩・絶句を模範とする。唐の詩にはさらに初唐、盛唐、中唐、晩唐の相違がある。近体を学ぶには、盛唐の詩を最上のものとし、中唐以後の詩を取らない。とりわけ宋詩を読んではならない。そもそも詩を作るには、ことばえらびが重要である。古詩には古詩で使われることばがあり、近体には近体で使われることばがある。古詩の中にさらに五言古風、七言歌行などの区別があり、近体の中にさらに五言七言律詩絶句の相違がある。その体にしたがって修辞の法はそれぞれ異なり、混用してはならない。さて古詩でも近体でも、ことばに出処も来歴もなく、口からでまかせにいうことばを「杜撰（ずさん）」という。これが詩の重大な禁止事項であり、犯さないように気をつけなければならない。一言一字であってもかならず古人の口から出て、古人の手をへたことばを使用しなければならない。韻のふみ方も古詩・近体それぞれの体にしたがって用いるものと用いないものがある。とりわけ杜撰を禁止する。かならず古人の手をへた字を使用しなければならない。絶句から八句の律詩までは、韻字の用い方がはなはだせまい。なぜなら韻字の数が少ないからである。とりわけ古人がよく用いた字をえらんで用いなければならず、見慣れない字を用いてはならない。排律は韻字の使用範囲がやや広い。なぜなら篇が長く句数が多いからである。しかしながら「仄韻を用いない」、「鄰韻に通押しない」、このふたつが近体の詩の重要な法則である。近体の詩で仄韻を用いたものを「拗体（ようたい）」といい、きわめてまれな事である。ただ五言絶句にはこれが多い。なぜなら五言絶句は古体を貴ぶからである。古詩は平韻・仄韻いづれも用い、鄰韻に通押することがとりわけ広い。東・冬の二韻が通押し、支・微・齊の三韻が通押し、魚・虞の二韻が通押し、佳・灰の二韻が通押し、眞・文・元の三韻が通押し、元・寒・刪・先の四韻が通押し、蕭・肴・豪の三韻が通押し、歌・麻の二韻が通押し、庚・青・蒸の三韻が通押し、覃・鹽・咸の三韻が通押する。上・去・入の三つの仄聲も、この例から類推することができる。これが用韻の大略である。そもそも詩を作ろうとおもえば、古詩は文選を熟読し、唐詩は明の高廷禮が編集した唐詩正聲①、唐詩品彙②、李攀龍の唐詩選③などを熟読して、そのなかの詩を数百首数千首諳記して朝夕諷詠すれば、自然に作ることができるようになる。はじめはただ古人の語を切り取って書き抜くことを習わなければならない。この作業をつづけてやめなければ、長年積み重ねた功によって、知らず知らずのうちに佳境に入り、最終的には詩人としての名声を確立することができる。宋元二代の詩は詩の邪道であり、学んではならない。明代になって、北地の李夢陽、信陽の何大復（何景明）があらわれてから詩道は復興し、濟南の李攀龍、呉郡の王世貞らがあらわれて、詩道はむかしのように復興した。これらの諸子はいづれも古を学んで、古人の趣旨を身につけた人たちである。今の学ぶものは、明の諸子が古を学んだやり方を見て手本とするのがよい。明の諸子の詩は古人の詩と異ならないことがすぐにわかる。詩は小技であるが、その影響するところは広大である。詩学の説には、六朝以来、諸儒の議論があり、唐宋以来、諸家の詩話がある。そのうち宋の嚴羽の滄浪詩話④は、詩道の正法眼藏⑤である。明の胡應麟の詩藪⑥は、古今の詩を詳細に論じつくしてあますところがない。あまたある詩話のうち、このふたつの書よりすぐれたものはない。学ぶものはかならず読まなければならない。以上が詩学のあらましである。

①高廷禮『唐詩正聲』二十二巻。
②高廷禮『唐詩品彙』九十巻。
③李攀龍『唐詩選』七巻。
④嚴羽『滄浪詩話』一巻。
⑤「正法眼藏」とは、人が本来具有している心の妙徳を形容したものである。転じて各種の学問の正統なものをいう。
⑥胡應麟『詩藪内編』六巻、『雑編』六巻、『外編』四巻。

○世の道学先生は詩を作ることができず、教えるにしても、学ぶものに詩を作ることを戒しめ（て作らせないようにす）る。これは詩の道を理解していない。詩は性情を吟詠するものであり、温柔敦厚を教えとする①。詩に古今はあるが、温柔敦厚の教えに古今の相違はない。だから今でも詩を作るものは、いつのまにか風雅の境

地に入って、自然に温柔敦厚の徳を形づくる場合がある。そのうえ学問は文字を識(し)ることを第一の努めとする。わが国の人は、元来文字にうとく、（文字にうとければ）学業は進みがたい。詩は文字をもてあそぶものなので、ここから六経の学にも進みやすい。だからこの国の人はとりわけ詩を学ばなければならない。このことは道学者流が理解していないことである。今の道学者流は、禅家の僧が教外別傳、不立文字②といっているのとおなじである。結局浮屠③の道と同じで、聖人の道からはなはだ遠くかけはなれている。

①『禮記』經解「其爲人也、溫柔敦厚、詩教也、疏通知遠、書教也、廣博易良、樂教也、潔靜精微、易教也、恭儉莊敬、禮教也、屬辭比事、春秋教也」。

②「教外別傳」とは、言語や文字などによらず、以心伝心で伝わる奥義のこと。「不立文字」とは、道は文字で伝えられるものではなく、心で悟るべきものであること。『五燈會元』世導章「世尊言、吾有正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙法門、不立文字、教外別傳、付囑大迦葉」。

③「浮屠」は、梵語 Buddha の音訳で、仏をいう。

○聖人の道を「文」という。六経はすべて文章である。文章に習熟しなければ六経を読むことはできない。文章に熟達しようとおもえば、西漢以上の古書を熟読しなければならない。しかし文章の道は、書を読むだけでみづから文を作るのでなければ、その深奥にいたることはむつかしい。魏の文帝の典論に「文章は經國の大業、不朽(ふきゅう)の盛事」①というのは、文章の功徳を賞賛して、その功用を述べたものである。「經國の大業」とは、国家を経営することは大きな事業であるが、文章を根本として行うということである。「不朽の盛事」とは、千年たっても朽ちないものとしては文章より盛んなものはないということである。宋儒が文章を捨てて理学を提倡してから、文章を作らない道学者流は多い。彼らはただ持敬窮理の工夫②を重要な務めとするだけなので、古文の道にうとくなり、古書を読むことができない。古書を読まなければ、なにによって六経を明らかにすることができようか。中華の人からしてすでにそうである。ましてやわが国の人は、文字から入らなければ学問に手をつける手がかりはない。だからこの国の学ぶものは、とりわけ文学を急務としなければならない。文学というのは文章の作り方を学ぶことである。みづから文を作らずに古人の文を読むだけではその理に通じるのはむつかしい。

①魏文帝『典論論文』（『文選』巻五十二）「蓋文章、經國之大業、不朽之盛事」。

②宋学のおける修養法のこと。「持敬」は敬愛の心を持つこと、「窮理」は個々の事物について、その理をきわめていくこと。

○そもそも文章を作ろうとおもうものは、まづその方法を知らなければならない。左傳・國語・史記・漢書などの書物を熟読してその語を諳記し、その文章の條理を理解すれば、筆を取って文をつづろうと気持ちが自然とわきおこり、何事であっても心にあることを文に書きあらわすことはむつかしい事ではない。しかし文には体があり法がある。体がなければ文であるとはいえず、法がなければ文として形を成さない。「体」とは体裁であり、文選が分類しているようなものが「体」である①。その文を熟読して、体裁がそれぞれ異なることを理解しなければならない。明の呉訥の文章辨體②、徐師曾の文體明辨③にはこのことについて詳しく辨じている。文を学ぶものは、かならずこれを読まなければならない。「法」とは法度である。いづれの体であっても、一篇の内に篇・章・句・字の四つの法がある。さらに起伏、照応、抑揚、関鎖、転換、波瀾、頓挫などの法がある。これらの法は、たとえば絶句の詩に起承転合があるのと同じである。法がない文は、いかに造語にたくみであっても一篇の條理がはっきりせず意味が通じがたいので、一篇の文章として成立しているとはいえない。これは無寸の尺、無星の秤（目盛りのないものさしやはかり）にたとえられる。古文は明の茅坤が八大家文抄④を著わしてから、後の学者はこれに従う。「八大家」とは、唐の韓愈、柳宗元、宋の歐陽脩、蘇洵、蘇軾、蘇轍、王安石、曾鞏の八人のことである。この八家のうち、法の謹厳さでは、韓愈・柳宗元のふたりの文におよぶものはない。歐陽永叔（歐陽脩）、蘇子瞻（蘇軾）は、宋の文章のうちではすぐれたものではあるが、いづれも法がない。そのうえ歐公（歐陽脩）は奇抜さが少なく、東坡（蘇軾）は古意に乏しく、老泉（蘇洵）はやはり東坡にお

よばない。潁濱（蘇轍）、荊公（王安石）、南豐（曾鞏）も老泉より劣っている。これらはいづれも師法とするには不充分である。だとすれば今の学ぶものは、かならずしも八大家を学ぶ必要はなく、ただ韓愈・柳宗元を文学の入門とするべきである。韓愈・柳宗元を学んで文法に通暁すれば、明の李滄溟（李攀龍）、王弇州（王世貞）の文集を読んで、修辞を学ぶとよい。「修辞」とはことばをえらぶことである。昌黎（韓愈）、柳州（柳宗元）は古文の名家であり、規律の謹厳さは諸家に抜きんでているが、古い言葉をきらって新奇を好むので、その文辞には古調に入らないところがある。明儒になると、李獻吉（李夢陽）、何景明がこの弊害を改めて、ことばえらびに務めるようになった。その後、李滄溟（李攀龍）、王弇州（王世貞）、汪伯玉（汪道昆）らがあらわれて、修辞の学がとてもさかんとなった。これを「古文辞」と名づけて、古文と呼ばれる唐宋の諸子の文と区別する。古文辞というのは、もっぱら西漢以上の人の語を用いて文章をつづり、東漢以後の語を一字も用いない。だから古書に習熟しなければ古文を作ることができないというのはこの意味である。以上が文学の大意である。詳細は文学の書を読んで、古人の議論を考究しなければならない。

①『文選』は「賦、詩、騒、七、詔、册、令、教、文、表、上書、啓、彈事、牋、書、檄、對問、説論、辭、序、頌、贊、符命、史論、論、連珠、箴、銘、誄、哀、碑文、墓誌、行狀、弔文、祭文」の各体に分類する。

②明・呉訥『文章辨體』五十巻、外集五巻。

③明・徐師曾『文體明辨』六十巻。

④明・茅坤『唐宋八大家文抄』一百四十四巻。

○尺牘（せきとく）も文の一端である。先儒が著わした尺牘の書は世の中にたくさん流通している。その書を熟読すれば自然に作ることができるようになる。

○「経学」とは、六経を読んで聖人の道に通暁することをいう。これは童蒙の手に負えることではない。たくさん古書を読んで、古文に明らかになり、古い言葉に通じれば、六経はおのづから明らかとなる。しかし三年や五年の努力で到達するのはむつかしい。かならず学びはじめてから二十年ばかりの経験を積み、三十歳以上になってから経学を修得しなければならない。順序をとびこえて早くから習ってはならない。

○「経濟」とは、天下国家を治めることをいう。聖人の道は天下を治める道である。六経を読んでも、天下を治める道に通じないものは、儒者ということはできない。六経を読むだけで、古今の事変に達しなければ、やはり経濟の術にくわしくない。かならず異国や本朝の古今の事蹟を閲覧し、その成敗を考察し、今日の時務に考えあわせれば、自然にその大要を知ることができる。これが儒者の本業であり、一大事因縁①である。だから学ぶものは幼い頃から経濟の志がなければならない。宋の范文正公（范仲淹）が「士は當に天下の憂ひに先じて憂ひ、天下の樂しみに後れて樂しむべし」②というのは、少年の時から抱いていた志節である。儒者はすべてそうありたいものである。

①きわめて重大な事縁の意。『法華經第一方便品第二』「諸佛世尊、唯以一大事因縁故出現於世」（諸佛世尊は唯だ一大事因縁を以ての故に世に出現す）。

②范仲淹『岳陽樓記』「然則何時而樂耶。其必曰、先天下之憂而憂、後天下之樂而樂歟。噫微斯人、吾誰與歸」。

学戒

学問には三つの戒しめがある。一つには宋儒の理学の書を読んではならない。性理の説は古の聖人の考えではない。孔子の教えとは異なり、佛老の教えとゆきつくところが同じである。わづかでも性理の説を聞いたものは、文章の道に入りがたく、六経の趣旨を会得しがたい。もっともこれを戒しめなければならない。二つには初学の時に経術を習ってはならない。経術を明らかにすることは、少年の士の手に負えることではない。それなのに早くからこれを学んで義理が精微であることを知ってしまえば、才気がこれに抑圧されて成長することができず、一生道学先生の風情で終ってしまう。この風は頭巾気習①と名づけられて、大雅の君子とはいわない。

だから二番目にこれを戒しめなければはならない。三つには人の講説を聴いてはならない。人の講説を聴くものは、たとえば人がかつぐかごに乗っていくようなものである。歩いてゆくものは路を諳記することができるが、人がかつぐかごに乗っていくものは路を諳記していない。そもそも学術は、みづから書を読んで一心に思惟するのでなければ、その義に通達することはできない。人の講説を聴くものは、聴いている時には義理は明らかになったような気がするが、その席を離れると大半忘却するので、退出してその書を読んでもあいまい模糊として通じないところが多い。これは心に疑問がないままに人の説を聞くからである。そもそも学業は熟読精思が根本であるので、いづれの書であっても心を留めて数回読み、精細に思惟すれば、かならずその本旨を理解することができる。しかし義理はきわまりないものなので、学業が進むにしたがってかならず疑問が生じる。疑問がみづからの力で解決するのがむつかしければ、先知先覚の人に尋ねて明らかにしなければならない。たとえばお腹がすけば食し、のどが渇けば飲むかのように疑問の事柄について人の論説を聞けば、雲や霧を払って日や月を見るようにはっきりと理解することができる。これが大きな利益である。このようにしてみづからの目力や心力をつくした上であれば、人の説を聞いてもとても有益であるので、耳学問は目学問におよばないというのである。今の世に、儒者であっても佛者であっても、講説をたくさん聞いたものが大きな事業を成しとげることは決してない。みづから努力して勉学することが大学問であるということを知らなければならない。今この三つの戒めは世上の学ぶものの共通した弊害であり、大儒先生でもこのことを知るものは稀である。古学に志して文章の道を修得しようと本気におもっているのであれば、かならずこれを戒しめなければならない。

①朱子学を信奉する儒者が、威儀にやかましく、儒服を着て頭巾をつけたがるような形式主義をののしっていうことば。「頭巾気」、「頭巾気象」ともいう。

唐順之『答皇甫柏泉郎中書』「然者、其於文也、大率所謂宋頭巾氣習、求一秦字漢語了不可得。凡此皆不爲好古之士所喜、而亦自笑其迂拙而無成也」。

倭讀要領卷下終

『倭讀要領』巻下原文（平假名校訂）

凡例

一、本譯註は『倭讀要領』享保十三年刊を底本とし、原文の片仮名を今の人が読みやすいように平仮名に直した。

一、原文は読点のみであるが、文意にしたがって句読点に直す。

一、標題、引用文などは返り点、送り仮名を附しているが、パソコン表記上の制約により省略した。書き下しは現代語訳の部を参照されたい。

一、語の左右にルビがあるものがあるが、左訓は語の下に〔　〕を附して入れる。

倭讀要領卷下

信陽太宰純德夫撰

點書法

吾國の人、書を讀むに、昔の人は、朱を以て字の四方四角と、中心とに、星を點じて、倭語のてにをはのしるしとして、かなもじを以て旁註することは無かりしなり。倭點といふ者すなはち是なり。後世は此點法廢（すた）れて、專（もつぱら）かたかなを以て、倭訓を旁註して、讀む者の爲に便利なる樣（やう）にせり。此事世に行はれてより、古の點法をば知れる者も稀（まれ）なり。今の倭訓の旁註は、是旁註なり、點とはいふべからず。古の星を點ぜし時の名を存（そん）して、點といへるなり。實（じつ）は點にあらずと知べし。古の星を點ぜしは、不便利なる樣（やう）なる事なれども、學者に益あり。今のかなもじを以て倭訓を

旁註するは、便利なる様なれども、却て學者に損あり。かなに目をつけて、本文を看ることに忽なる故なり。然れば今日の學者、文學に志あらば、只無點の本を看るべきなり。古の點本は、無點の如し。然れども畢竟倭語の讀の爲に設たることなれば、是をも禁止すべきなり。凡中華の書を讀むには、中華の點法を用ふべし。中華の人の書を點ずるは、句讀を分ち、文法を示さん爲なり。是緊要の事なり。知らずばあるべからず。此に其大法を錄して、初學に示す。

○句讀を點ずることは、其法一様ならず。或は圈〔まる〕を用ひ、或は批を用ふ。圈とは、○なり、批とは、丶なり。祕書省の校書の式には、句は字の旁に點じ、讀は字の中間に點ずといへり。中華の書の中に、此式を用て句讀を點じたる本あり。其時は小圈を用ふ。又句には圈を用ひ、讀には批を用ることあり。其時は句も讀も皆旁に點ず。又句と讀とを別たず、皆圈を用ひ、皆批を用ることあり。其時も句讀俱に旁に點ず。かくの如く種種の點式あり。人人の意にて、時に臨て何れの式をも用るなり。中華より來れる書を多く見て、其異を考ふべし。

○評點といふは、文章を看る時、或は語の奇特なる處、或は字眼、或は文法の波瀾ある處、抑揚、起伏、頓挫の處には、點を加ふるなり。或は圈を用ひ、或は批を用ひ、或は〇を用ひ、或は◎を用ひ、或は●を用ふ。其法一例に非ず。定て教がたし。中華の書に、先儒の點ぜる本多し、集て看るべし。

○段落を分るには、鉤畫を用ふ。章首には「を用ひ、結末には」を用て、前後を隔斷〔へだてきる〕す。皆是を鉤畫といふ。

○此方の學者の點法に、朱びきといふことあり。地名には、字の右に單畫し、國名には、字の右に雙畫し、人名には、字の中に單畫し、官名には、字の左に單畫し、書名には、字の中に雙畫し、年號には、字の左に雙畫す。歌に曰く、

右所、中は人の名、左官、中二は書の名、左二は年號

中華にはかくの如くの種種の畫法なし。唯人名に字の右に單畫し、地名に字の右に雙畫するのみなり。或は書名に字の右に雙畫したる書もあり。然れども大抵は地名にも畫することなく、人名のみに畫すること多し。官名年號等には全く畫せず。又日本の畫は、字の左右に畫するも、字にかけて畫す。中華の畫は、必字をはづして畫す。又中華にては、刪去べき字には、字の中に畫す。此方の人名の畫の如し。是を抹といふ。抹は、塗抹なり。ぬりけすなり。凡書を看るに、地名官名書名年號などは見やすく、人名は甚まぎれやすし。故に中華の人の書を點ずるには、大抵人名にばかり畫するなり。

○吾國の人は、書を點ずるに、專朱を用ふ。中華の人は、青黄綠紫等の色を兼用ふ。昔元の許魯齋が通鑑綱目を讀しには、五色を以て點ぜしとかや。是識別〔しるしわかつ〕に便なるのみならず、目を養ふところもあれば、朱の一色に限らず、心に任て他の色をも兼用んこと可なり。

抄書法

抄は、ぬきがきなり。抄書とは、書を看る時、有用の語を抄するなり。凡書を讀む者は、必數十張の紙を小冊子〔とぢほん〕となして、奇字要語を抄すべし。是に五つの益あり。一つには故事古語を記憶す。二つには他日の檢閲〔たづねみる〕に便なり。三つには字を識る。四つには書學〔てならひ〕進む。五つには抄するにより、其本書を看ること必精し。蘇東坡が詩に、白首猶ほ書を抄すといへるは、老に至ても抄書を已めざることをいへるなり。さて抄書せば、必眞字にて整齊に書くべし。當時〔そのとき〕心の忙きままに、草草にすることあるべからず。且先かくの如くして、後日に改寫〔かきなをす〕せんなどおもへども、日日に事多くなりゆけば、改寫するに暇なく、歳月を歴て看るに、草字にて胡亂〔めつた〕に書たるは、己が手跡にても、讀がたきことあり。況や人にも看すべきことある時、必人を誤らしむるなり。端正に書たる者だにも、三寫すれば烏焉馬の謬あり。況や胡亂に書たるをや。學者これを愼むべし。又凡學者は楷書を學ばずはあるべからず。學問に用あること、楷書より要なるはなし。楷書とは、眞字なり。

發音法

音を發すといふは、發は、點發なり。點發とは、四聲を點ずるをいふ。或は圈發といふ。其法字の四角に半圈を加ふ。平聲は下の左角に加ふ。上聲は上の左角、去聲は上の右角、入聲は下の右角なり。凡字に獨音なるあり、多音なるあり。天地日月山川林麓等の字の如きは、獨音なり。獨音は點發を用ひず。好惡知識飲食衣冠等の字の如きは、多音なり。多音とは、二音以上をいふ。或は三四音、或は五六音なる者あり。多音は、點發を用て、其音を別つ。是を發音といふ。字に多音あるは、其中に本音一つありて、餘は皆旁出といふ者なり。本音には點發なし。旁出には、四聲に隨て半圈を點じて誌とす。其例をいはば、好は上聲、よしと訓ず。惡は入聲、あししと訓ず。知は平聲、しると訓ず。識は入聲、しると訓ず。飲は上聲、のむと訓ず。又のみものなり。食は入聲、くらふと訓ず。又くひものなり。衣は平聲、ころもなり、きものなり。冠は平聲、かむりなり。已上皆本音なり。點發を用ひず。好の字、去聲は、このむと訓じ、よみすと訓じ、よしみと訓ず。惡の字、去聲は、にくむと訓ず。平聲は、烏の字と通用して、いづくんぞと訓ず。知の字、去聲は、智の字と同じ、智慧なり。識の字、去聲は、誌と同じ。記憶記錄の義なり。しるすと訓ず。飲の字、去聲は、のましむと訓ず。食の字、去聲は、くらはしむと訓じ、やしなふと訓ず。又飯なり、いひと訓ず。衣の字、去聲は、きると訓ず。衣を著るなり。冠の字、去聲は、かむりすと訓ず。冠を著るなり。已上は皆旁出なり。此時點發を用ふ。餘は推て知べし。但此類は、本音と旁出と、四聲別なれば、點發すること勿論なり。著見の見は音現、あらはる、あらはす、しめすと訓ず。俗現に作る。見聞の見と、音別にして、同く去聲なり。然れども現の音なるときは、去聲に點發して其誌とす。歡樂の樂は音洛、たのしむと訓ず。音樂の樂と音別にして、同く入聲なり。然れども洛の音なるときは、入聲に點發して其誌とす。此等は四聲異ならざれども、旁出の音なることを知らしめん爲に點發するなり。餘は此例を以て推べし。凡經史の註に、音釋あるは、多くは難字なり。音釋といふは、字音を註するなり。音釋に四種あり。一つには反切、二つには直音、三つには四聲、四つには如字なり。反切といふは、見は賢遍の反とある類是なり。直音といふは、樂は音洛とある類是なり。四聲といふは、重は平聲、濟は上聲、易は去聲、度は入聲とある類是なり。如字といふは、某は字の如しとある類是なり。難字には反切、或は直音を附て、其音を明す。難字にあらずして音釋あるは、必多音の字なり。多音なるをば、或は反切を附け、或は直音を附け、或は四聲を註して、旁出の音なることを知らしむ。如字は、字の如しといふことなり。多音の字を、旁出の音に讀まず、本音のままに讀むとき、如字と註するなり。此外は音釋なければ、皆本音の如く讀むなり。然れども多音の字を、本音に讀むとき、如字と註するは、まぎらはしきことある故なり。まぎるることなき處は、註するに及ばず。凡中華の書を讀むに、音釋あるは、音釋に依て讀む。音釋なきは、點發に依るなり。故に初學の士は、必點發を習ふべし。是緊要の事なり。

倭讀例

倭讀の法は、前にいへるが如し。學者其旨を得て、其意を推さば、思過半ならん。茲に又相如が賦二篇と、古詩十九首とを錄して、句讀點發を具へ、訓點を加て、初學の爲に、倭讀の例を示すこと左の如し。初學是を熟讀して、其法を悟ることあらば、一部の文選、皆讀得べし。文選既に讀得ば、凡經史詩文、自然に其の讀法を悟らん。亦是一隅を擧る敎なり。

【倭讀例として示される子虛賦、上林賦、古詩十九首の三篇については、前半の「現代語訳」の該当箇所を参照されたい】

右二賦、十九詩、倭讀の體、大較かくの如し。皆句讀を正し、繁冗〔むつかし〕の讀を去て、簡約〔ことすくな〕に從ひ、義理の通ずるを主とせり。初學是に熟して後、倭刻の文選を看て、古來の讀と、今の讀と繁簡の異なることを識得せば、邪正自見ゆべし。他の書といへども、皆然らずといふことなし。必しも一一に面授口傳せず。

學則

學問の道、古と今と異なり、中華と吾國と同からず。近世の諸儒、其好む所に從て、各一家を成し、自門戸を立つ。其業とする所、人人殊なり、專經義を談じて、道德を修する者あり、文學を講ずる者あり、詩を好む者あり、宋儒の理學を宗とする者あり、博覽を務て、群書を涉獵する者あり、名物度數を精覈〔くはしくあきらむ〕する者あり。此輩の學、各明むる所ありて、皆當時の師範たり。後世の學者、何ぞ輒くこれを是非せんや。但恨らくは、道德を談ずる者は、文章に達せず、文學を講ずる者は、經義に昧く、理學を宗とする者は、風雅の趣なく、涉獵を事とする者は、駁雜に終り、名物を精覈する者は、大道を知らず。又詩を作る者は、文に拙く、文を作る者は、詩に拙し。是皆學問の道に於て、其綱領を知らず、本を捨て末を逐ひ、一偏に倚て、全體を見ざる故なり。かくの如きは、通儒といふべからず。時に古今あれども、學問の道は二つならず。人皆靈智を具す。善く學ぶときは、古人にも及ぶべし。故に學問は、邪路を履まず、正しき方に向て、其門を得て入べきなり。然るときは、志の深淺と器の利鈍とに因て、其成就する所、大小高下あるべけれども、其才德は必古人に似るべきなり。今童蒙の爲に、學問の法則を立て、從學の徒に示すこと左の如し。

○凡書生の業は、句讀を習ふより始まる。中華にて句讀を習ふといふは、此方にいふ素讀なり。句讀を習はば、先華音を學て、略習熟して、後に倭語の讀を習ふべし。其書は孝經を始とすべし。孝は百行の本にして、天子より庶人に至まで、通行の道なればなり。次に論語を受べし。論語は聖人の祕奥、六經の要領なり。聖人の道を學ぶ者は、孔子を信奉せずはあるべからず。論語を讀て、孔子の尊きことを知が故なり。四書を用ることは、宋儒より以來なり。大學中庸は、禮記の中に在り。孟子は諸子の類にして、其說孔子の旨に合ざる處あり。初學の士の讀べき書にあらず、姑是を置くべし。次に毛詩、次に尚書を讀べし。左傳に詩書は義の府なりといへり。昔周の代に、樂正の官ありて、士を成すことを掌る。詩書禮樂の四つを以て國子に敎ふ。是を四術四敎といふ。一年の內、春秋は禮樂を敎へ、冬夏は詩書を敎ふといへり。四敎の中に、禮樂の二つは、專其事を習ひ、詩書の二つは、專其文を誦するなり。故に古人詩を誦し書を讀むといふは、其文を誦することをいへるなり。後世は禮樂の敎傳はらず、其事を習ふべき樣なし。唯經傳に記せるを見て、僅に其義を考るのみなり。詩書は其文傳はりてあれば、是を誦讀することは、尚稍古に及ぶべし。然れば此二書に孝經論語を加へて、專これを誦讀するを童子の業とすべし。幼學の者の句讀を受ること、此四部に止まるべし。他の書は、必しも師の口授を待て讀んと思ふべからず。此四部を誦習して、文字を識り、句讀に達すれば、何れの書も讀るるなり。今の學者、童子の時、其師に就て、四書五經等を受讀といへども、只此方の點本を用て、倭讀を授かりて、僅に一二遍讀過〔よみとをる〕したるまでにて、自己に其書を誦習することなき故に、字を識らず、句讀を辨へず、其文を記憶することなし。されば事に碍られて、少も廢學すれば、其受讀たる四書五經さへ、忘却〔わする〕すること多し。況や他の書に於て、何としてか讀得ることあらんや。是學て習はざるの失なり。故に孔子、學て時に之を習ふとのたまへり。凡學業は、習ふことを貴ぶなり。多く學て習はざるより、少く學て習熟するを善とす。今擬して童子の學は、孝經、論語、毛詩、尚書、四部の書を誦習するを先務とす。さて此四部の書を讀むに、註本を用ふべからず。孝經は孔安國が傳した る古文を用て、本文を抄寫〔かきぬきうつす〕し、餘の三部は、十三經の中より、各其本文を抄寫し、毛詩と尚書とは、小序を併て抄寫すべし。其上に、孝經は孔安國が註義に從ひ、論語詩書は、註疏の義に從て、句讀を明にし、字音を正くして、法の如く點畫を加ふべし。決して倭點を加へ國字〔かな〕を附べからず。受讀に至ては、多きを貪るべからず。初は一日に十字二十字より、力の出來るに隨て、漸漸に增加して、五七十字に至り、二百字許を限とすべし。人の記性〔ものおぼへ〕に强弱あり、精力〔きこん〕に多少あり。一槩に定率をなしがたし。然れども多く受れば、誦習しがたくして、忘るること速なり。縱聰明伶俐なる者も、今の限を越べからず。當日授かりたる處をば、卽時に讀取こと百遍以上すべし。其上に

前數日に授かりたる處を以て、今日授かりたる處に連屬して、又讀取こと五七十遍すべし。誦讀の間、徐緩に讀去べし、急疾なるべからず。聲音響亮〔ひびきさゆる〕にして、吾伊なきを善とす。吾伊とは不伶俐なる者の書を讀むに、滯ることありて、讀過られぬ時、吾伊といふ聲を出してをめくをいふなり。是尤聽にくきものなり。總じて讀書は、華音にても倭讀にても、人の耳に入て聽にくからぬ樣に面白き樣に讀む。是亦一つの用心〔こころがけ〕なり。又凡學業は、日課を立て勤むべし。日課とは毎日某某の事を幾ほどなすべきといふことを定おきて、懈怠なく行ふをいふなり。歷世の儒先、往往に讀書の法を立る者あり。家家不同なれども、大抵皆習熟することを貴びて、嚴に課程を立ることを言り。初學の用心、專此一事に在り、努力して遵行すべし。中庸に人一たびに之を能すれば、己之を百たびす、人十たびに之を能すれば、己之を千たびすといへり。才智の人に及ばざることを患ふべからず、只志の立たず、勤の至らざることを恥べきなり。

○四部の書既に誦讀習熟して、諳記するに至らば、古註の三禮、周易、幷に春秋の三傳、國語を取て、讀こと四五遍すべし。三禮は周禮、儀禮、禮記なり。春秋の三傳とは、左氏、公羊、穀梁の三傳なり。國語も左丘明が作にて、春秋に屬する書なり。故に一名を春秋外傳といふ。初學此等の書を讀む時、必しも其義を明めんとすべからず。只本文を記憶するを務とすべし。其故は、六經の義理、初學の容易に解する所にあらず。必古書を周覽〔あまねくみる〕し、古訓を精覈して、歲月を積て後、始て其辭義に達することなれば、初學の急務にあらず。然れども六經は敎道の軌則、文章の本原なれば、初學の時、是を讀まざれば、本を立る所なきなり。此業終れば、六經既に遍し。次に文選を讀べし。聖人の道は、文章を體とす。文選は文學の入門なり。初學既に六經を讀て、頗其文句を記憶したる上に、文選の白文を取て、連讀〔つづけよむ〕すること五七遍すべし。是も强に其義を明めんとせず、只文句を記憶することを要とすべし。凡初學の士、前の四部の書を誦習して、既に熟すれば、六經文選の類、人に句讀を授かるに及ばず、自己の力にて、大略讀得べし。若識らざる字に遇はば、梅誕生に問べし。梅誕生に問ふとは、字彙を閲してこれを求るなり。其上に猶讀がたき處あらば、强て讀んとすべからず。姑これを置て、次の文に移るべし。かくの如くにして數遍を累ぬれば、初讀がたかりし處、後には自然に讀るるなり。凡書を讀む者は、字彙をば一部必座右に置べし。古今の字書多けれども、他の書は字を尋るに勞煩なり。字彙は檢閲甚易くして、勞なきが故なり。六經文選既に業を終ぬれば、字を識こと漸多く、義理の路も開る故に、童子の學、是に至て小成といふべし。

○六經文選の業終りて、稍力の加はることを覺へば、司馬遷が史記を取て、始より終まで、熟讀一遍すべし。次に班固が漢書を取て、亦始より終まで、熟讀一遍すべし。熟讀とは、前の六經文選を讀たる如く、其文のみを讀過するにあらず、義理を尋求め、文法を玩索して、仔細に看るなり。其中に史記の律書、歷書、天官書、漢書の律歷志、天文志等は其事を學ばずしては、其書讀がたく、且初學の先務にあらざれば、姑これを略すべし。此二書は古文の純粹なれば、讀がたく解しがたき處多し。逐一にこれを究んとすれば、一處に滯て進がたく、卒には厭倦〔いとひうむ〕の心を生ずるなり。只難き處を略して、易き處を讀べし。反覆熟讀して、本末貫通し、又他の書を讀て、彼此融會すれば、自然に通曉するなり。凡書を讀むには、融會貫通といふことあり。何にても一部の書を看るに、解しがたき處あるを、必これを解せんとおもひて、一處に滯ては、いかほど心を焦しても、いつまでも通ぜざるものなり。姑是を捨置て、解しやすき處ばかりを讀て、其一部を終て、又他の書を取て看れば、案の外に前に看たる書と思合することあり。日を累ね月を積て、博く諸の書を看れば、必此と彼と互相に發明することありて、從來の疑惑も、漸漸に釋る。是を融會といふなり。此融會は、一部の内にもある事なり。融會は譬へば氷の釋るが如し。大なる池の氷は、春風を得ても、一旦には釋けざれども、此彼解け開れば、遂に盡釋るなり。又一部の書を看るに、眼全部に彌らざれば、其旨を得ることなし。必反覆〔うちかへす〕熟讀すること數十百遍して、全部を一目に覽るほどになりたるとき、始終本末相照て暗きことなし。是に至て一部の大義始て明なり。是を貫通といふ。一部の内のみにも限らず。六經の如きは畢

竟一理貫通の物なり。貫通は譬へば道路を行くが如し。行なれぬ路を生路といふ。行なれたるを熟路といふ。生路を行くは、おぼつかなきものなり。一つの路を幾度も往返して熟すれば、險易高下心に諳んじて、暗夜〔やみのよ〕にも迷ふことなし。是融會貫通の説なり。凡學問は火急にすべからず。優柔とて、ゆたかにゆるゆるとすべし。涵泳とて、物を水に浸て、水氣の透徹〔とをる〕するを待が如くにすべきなり。杜預が左傳の序に、優にして之を柔にす、自ら之を求めしむ。饜にして之を飫す、自ら之に趨しむ。江海の浸、膏澤の潤すが若く、渙然として冰釋し、怡然として理順ふ。然して後得たりと爲すなりといへるは、此義なり。饜飫とは、思惟して自得したる時、これを喜ぶこと、飢たる者の食を得て飽けるが如くなることをいへるなり。

○史漢既に讀過せば、次に司馬溫公の資治通鑑を取て、讀こと一遍すべし。凡學者は古今の事實を通知するを要務とす。況や吾國の人は、中國は如何なる國にて、何れの代に如何なる帝王ましまして、如何なる政を行ひたまひ、如何なる賢人君子ありて、如何なる事をなし、其代は如何にして興り、如何にして亡たりしという様なることを知らず。故に經書を讀むといへども、菅然として事理に達せず。然れば史漢より以下、歴代の國史を讀て、其事實を知べけれども、二十一史等の書、洋洋浩瀚にして、輒く讀過すべきにあらず。其大略を記したる者、通鑑より近きはなし。朱子の綱目は、通鑑に依て作りたれども、綱目を立たる故に、事實連屬せず。且議論刻剝にして、宇宙の間に全人なしと見ゆ。初學これを看れば、是非の心盛になりて、仁を害することあり。溫公の通鑑は、文連屬して、事實を見るに便なり。議論も較綱目に愈れり。初學これを一覽すれば、天下古今の事、其大略を知る故に、他の諸書を看る時、助となること多し。學力寖長じたる上には、二十一史等を讀て、知識を廣くすべし。其時に至ても、前に通鑑を看たる功に緣て、先其大綱を得るなり。是すなはち學問の要路なり。さて通鑑を讀むには、只事實を看ることを要とすべし。議論の處をば、必しも研究すべからず。

○初學の務、上にいへる如く、次第に業を卒ぬれば、力を用ること略全くして、古學の規模已に立り。是より其力に隨て、博文を務べし。博文とは、博く古今の書を覽るなり。然れども、聖人の道は六經に在り。六經を明めずしては、通儒といふべからず。六經を學ぶを古學とす。六經は皆文章なり。文章に達せざれば、六經を讀ことあたはず。六經の文は古文なり。故に古文に達せざれば、六經を讀ことあたはず。古文の學は、古書を讀むに在り。古書とは、西漢以上の書を指ていふ。東漢以後は、文章古に及ばず。六朝より降ては、古文變じて四六となりて、古を去こと遼絶なり。故に古學に志す者は、專西漢以上の書を讀て、古文辭を習ふべきなり。古文辭に達したる上には、後世の書をも讀て、聞見を廣くすべきなり。古書の中にも、眞僞純駁ありて、一概に信用しがたし。先秦の文には、左傳、國語、老子、墨子、晏子春秋、公羊傳、穀梁傳、孟子、荀子、莊子、列子、韓非子、楚辭、戰國策、呂氏春秋。西漢の文には、淮南子、史記。此等は皆古文の純粹なる者なり。班固が漢書は、東漢の文なれども、西京の氣格を失はずして、太史公と並驅する故に、後人これを尊て、先秦西漢の古文に列するなり。文選は梁の代に昭明太子の編集せられし者にて、東漢以後の文も多く入たれども、古文の奇特なる者を多く載て、而も體を分たる故に、後世是を以て文學の模範〔いかた〕とするなり。されば明の汪伯玉が古文十三家にも、文選を入れたり。十三家は皆上に擧たる古書の内なり。

○凡學者は師なくはあるべからず、亦友なくはあるべからず。師は道を問ひ、業を受け、惑を解く者なれども、尊嚴なる者なれば、平日の助になりがたし。友を會して講習討論すれば、聞見を廣くする益尤多し。友の中に又先輩あれば、誘掖贊導して、道に進ましむる功あり。故に唯師に學ぶのみにて、友の助なき者は、學業成就しがたし。されば曾子の言に、君子、文を以て友を會し、友を以て仁を輔くとあり。學記には獨學して友無れば、則ち固陋にして、聞くこと寡しといへり。今の學者も、上の如くの古書を讀むに、友なき者は、漢の孫敬が如く、戸を閉て獨讀べし。友ある者は、一處に集りて會讀するには如ず。

○凡學者は、風雅の情なくはあるべからず。風雅の趣を知ことは、詩を學ぶに

在り。然るに古人の詩を讀て、其義を講明しても、風雅の趣をば知べけれども、自己に作らざれば、徹底して其意を得ることなし。詩を作らんとおもはば、先體裁を辨知すべし。體とは、すがたなり。裁とは、つくりなり。詩に種種の體あり。吾國の和歌に、長歌、短歌、旋頭、混本などいふことあるが如し。詩の體は、大分二つあり。一つには古詩の體、二つには近體なり。毛詩三百篇より、唐の初に至までを古詩といふ。唐の律詩絶句を近體といふ。古詩の中に又諸體あり、風雅の體あり、樂府の體あり、選詩の體あり、唐の古詩あり。風雅とは、詩經三百篇の體なり。樂府とは、漢朝以來、歷代の樂歌の辭なり。選詩とは、文選の詩なり。是を選體といふ。唐の古詩とは、唐人の作れる古風の詩なり。又古書に載たる歌謠等の詞に擬して作るを、總て擬古といふ。かくの如く種種の體ありて一樣ならず。近體は、唐の五七言の律絶を法則とす。唐の詩に又初唐、盛唐、中唐、晩唐の不同あり。近體を學ぶには、盛唐を極致として、中唐以後を取らず。尤宋詩を看るべからず。凡詩を作るには、辭を揀ぶを要とす。古詩には古詩の辭あり、近體には近體の辭あり。古詩の中に、又五言古風、七言歌行等の差別あり。近體の中に、又五七言律絶の不同あり。其體に隨て、修辭の法各別なり、混用すべからず。さて古詩にても、近體にても、辭に出處も無く、來歷も無く、自己の口より出すを杜撰といふ。是詩の大禁なり。愼て犯すことなかれ。必一言一字も、古人の口より出、古人の手を經たるを取用ふべし。韻を押ことも、古詩近體それぞれに隨て、殊に用捨あり。尤杜撰を禁ず。必古人の手を經たる字を用ふべし。絶句より八句の律までは、韻字を用ること甚狹し。韻字の數少きが故なり。尤古人の多く用たる字を擇て用ふべし。怪僻なる字を用ふべからず。排律は韻字を取こと差廣し。篇長くして句數多きが故なり。然れども仄韻を用ひず、鄰韻を通押せず。是近體の大法なり。近體に仄韻を用たるを拗體といふ。稀なる事なり。唯五言絶句に是多し。五言絶句は古體を貴ぶが故なり。古詩は平韻仄韻用ひざることなく、鄰韻を通押すること尤廣し。東冬二韻通押し、支微齊三韻通押し、魚虞二韻通押し、佳灰二韻通押し、眞文元三韻通押し、元寒刪先四韻通押し、蕭肴豪三韻通押し、歌麻二韻通押し、庚青蒸三韻通押し、覃鹽咸三韻通押す。上去入の三仄聲も、此例を以て推べし。是用韻の大略なり。凡詩を作らんとおもはば、古詩は文選を熟讀し、唐詩は明の高廷禮が集たる唐詩正聲、唐詩品彙、李攀龍が唐詩選等を熟讀して、其内の詩を諳記すること數百千首に至て、朝夕諷詠すれば、自然に作り得らるるなり。始は只古人の語を剽竊〔きりとりぬすむ〕して抄寫〔かきぬく〕することを習ふべし。是を務て息ざれば、積累の功によりて、いつとなく佳境に入て、終には詩名を成就するなり。宋元二代の詩は、詩の惡道なり、學ぶべからず。明の代に至て、北地の李夢陽、信陽の何大復より、詩道復興り、濟南の李攀龍、呉郡の王世貞等出て、詩道遂に古に復せり。此諸子は、皆能古を學て、古人の旨を得たる者なり。されば今の學者は、明の諸子の古を學たるを見て法則とすべし。明の諸子の詩は、直に古人の詩に異ならずと知べし。詩は小技なりといへども、其道干涉〔あづかりわたる〕する所廣大なり。詩學の説は、六朝以來、諸儒の論あり、唐宋以來、諸家の詩話あり。其中に宋の嚴羽が滄浪詩話は、詩道の正法眼藏なり。明の胡應麟が詩藪は、古今の詩を論ずること、甚委曲にして餘蘊なし。詩話の書多き中に、此二書より善きはなし。學者讀ずはあるべからず。是詩學の大較なり。

○世の道學先生、詩を作ることあたはず。學者に教るにも、詩を作ることを戒む。是詩の道を知らざるなり。詩は性情を吟詠する者にて、溫柔敦厚を以て教とす。詩に古今あれども、溫柔敦厚の教は、古今の異なし。されば今も詩を作る者は、いつとなく風雅の域に入て、自然に溫柔敦厚の德を成すことあり。且學問は文字を識を始とす。吾國の人は、本來文字に疎くして、學業進みがたし。詩は文字を玩ぶ者なれば、是よりして六經の學にも進みやすし。然れば此方の人は、殊に詩をば學ぶべきなり。是道學者流の知る所にあらず。今の道學者流は、只禪家の僧の教外別傳、不立文字といふが如し。畢竟浮屠の道に同じて、聖人の道を去こと遠甚なり。

○聖人の道を文といふ。六經は皆文章なり。文章に達せざれば、六經を讀ことあたはず。文章に達せんとおもはば、西漢以上の古書を熟讀すべし。然れども文章の道は、只書を讀たるのみにて、自己に文を作らざれば、其奥妙に造ること難し。魏

の文帝の典論に、文章は經國の大業、不朽の盛事といへるは、文章の德を贊じて、其功用を述たるなり。經國之大業とは、國家を經營するは大業なるに、文章を以て本とするなり。不朽之盛事とは、千載を經て朽ざること、文章より盛なる者なしとなり。宋儒文章を捨て、理學を倡ひしより、道學者流多くは文章を作らず。只持敬窮理の工夫を要務とする故に、古文の道に疎くなりて、古書を讀ことあたはず。古書を讀まざれば、六經何によりてか明むることを得ん。中華の人既に然なり。況や吾國の人は、文字より入らざれば、學問に手を下すべき處なし。故に此方の學者は、殊に文學を先とすべきなり。文學といふは、文章を作ることを學ぶなり。自己に作らずして、古人の文を讀たるのみにては、其理に達しがたきなり。

○凡文章を作らんとおもふ者は、先其道を知べし。左國史漢等の書を熟讀して、其語を諳記し、其文理を解すれば、自然に筆を取て文を屬んと思ふ心起りて、何事にても心にあることを、文に著すことは、難き事にもあらず。然れども文には體あり法あり。體なければ文といはず、法なければ文を成さず。體とは體裁なり。體は、文選に分たるが如し。其文を熟讀して、體裁の各別なることを知べし。明の吳訥が文章辨體、徐師曾が文體明辨に是を辨ずること甚詳なり。文を學ぶ者は、必是を看るべし。法とは、法度なり。何れの體にも、一篇の内に、篇章句字の四法あり。又起伏、照應、抑揚、關鎖、轉換、波瀾、頓挫等の法あり。此等の法は、譬へば絶句の詩に起承轉合あるが如し。文に法なきは、造語工にても、一篇の條理分れず、意義通じがたき故に、成就せる文といはず。これを無寸之尺〔ものさし〕、無星之秤〔はかり〕に譬るなり。古文は明の茅坤が八大家文抄を著してより、後の學者これに從ふ。八大家とは、唐の韓愈、柳宗元、宋の歐陽脩、蘇洵、蘇軾、蘇轍、王安石、曾鞏なり。此八家の中に、法度の森嚴なるは、韓柳二子の文に如はなし。歐陽永叔、蘇子瞻は、宋文の中にては勝たれども、皆法なし。且歐公は奇拔なること少く、東坡は古意乏し、老泉は又東坡に及ばず、潁濱、荊公、南豐は、又老泉が下なり。是皆師法とするに足らず。然れば今の學者は、必しも八大家を學ばずして、只韓柳を以て文學の入門とすべし。韓柳を學て、文法に通達せば、明の李滄溟、王弇州が集を讀て、修辭を學ぶべし。修辭とは、辭を揀ぶなり。昌黎、柳州は、古文の名家にて、法度の森嚴なることは、諸家に卓絶なれども、陳言を厭て新奇を好める故に、其文辭古調に入らざる處あり。明儒に至て、李獻吉、何景明より、此弊を改て、辭を修ることを務とす。其後滄溟、弇州、汪伯玉等出て、修辭の學大に興れり。是を古文辭と名づけて、唐宋の諸子の文を古文といふに異にせり。古文辭といふは、專西漢以上の人の語を用て辭を屬て、一字も東漢以後の語を用ひざるなり。故に古書に熟せざれば、古文を作ることあたはずといふは、此義なり。是文學の大意なり。詳なることは、文學の書を讀て、古人の論を考ふべし。

○尺牘も亦文の一端なり。先儒の著せる尺牘の書世に多し。其書を熟讀せば、自然に作り得べし。

○經學とは、六經を讀て、聖人の道に通達するをいふ。是童蒙の及ぶ所にあらず。多く古書を讀て、古文を明め、古言に通ずれば、六經自明なり。然れども三年五年の工夫にては至りがたし。必初學より、二十年ほどの功を積て、年三十以上にして、經學を修すべし。等を躐て早くこれを習ふべからず。

○經濟とは、天下國家を治るをいふ。聖人の道は、天下を治る道なり。六經を讀ても、天下を治る道に達せざるは、儒者といふべからず。六經を讀たるのみにて、古今の事變に達せざれば、又經濟の術に昧し。必異國本朝の古今の事蹟を覽て、其成敗を考て、今日の事務を思惟せば、自然に其要を知べし。是儒者の本業、一大事因緣なり。されば學者は童子の時より、經濟の志なくはあるべからず。宋の范文正公の士は當に天下の憂に先じて憂ひ、天下の樂に後れて樂むべしといへるは、少年よりの志節なり。凡儒者はかくあらまほしき者なり。

學戒

學問に三つの戒あり。一つには宋儒の理學の書を讀べからず。性理の説は、古聖人の意にあらず。孔子の教に違て、佛老と歸を同くするなり。僅にも性理の説を聞る者は、文章の道に入がたく、六經の旨を得がたし。最これを戒むべし。二

つには初學の時、經術を習ふべからず。經術を明むることは、少年の士の及ぶ所にあらず。然るを早くこれを學て、義理の精微なることを知れば、才氣是に屈抑せられて、長ずることを得ず。一生只道學先生の歸にて終るなり。此風を頭巾氣習と名づけて、大雅の君子といはず。故に次にこれを戒むべし。三つには人の講説を聽べからず。人の講説を聽く者は、譬へば人の肩輿〔のりもの〕に乘て行が如し。歩行する者は、能く路を諳んじ、肩輿に乘て行く者は、路を諳んぜず。凡學術は、自己に書を讀て、心を潛て思惟するにあらざれば、其義に通達することなし。人の講説を聽く者は、其聽く時は、義理明白なる樣なれども、其席を離るれば、大半忘却する故に、退て其書を看れば、朦朧として通ぜざる處多し。是心に疑惑なくして、人の説を聞く故なり。凡學業は、熟讀精思とて、何の書にても、心を留て數遍讀て、精細に思惟すれば、必其旨を得るなり。然れども義理は窮なき者なれば、學業の進むに隨て、必疑惑を生ず。疑惑は自己の力にて解かたければ、先知先覺の人に問て、これを明むべし。譬へば飢て食し、渴して飲するが如く、疑惑の事を以て、人の論説を聞けば、雲霧を披て日月を見るが如し。是大なる益なり。かくの如く自己の目力心力を竭したる上には、人の説を聞ても、其益ある故に、耳學は目學に如ずといふなり。今の世に、儒者も佛者も、多く講説を聞たる者は、必大業を成就することなし。只自己に力を用るを大學問とすと知べし。今此三戒は、世上の學者の通患にて、大儒先生もこれを知こと稀なり。眞に古學に志て、文章の道を修せんとおもはば、必これを戒むべし。

倭讀要領卷下終

（了）